

坊っちゃん

夏目漱石

青空文庫

一

親おやゆづ譲りの無鉄砲むてつぽうで小供の時から損ばかりしている。小学校

に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰こしを抜ぬかした事がある。なぜそんな無闇むやみをしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談じょうだんに、いくら威張いばつても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃はしたからである。小使こつかいに負ぶさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼めをして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴やつがあるかと云いったから、この次は抜かさずに飛

んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰^{もら}つて奇麗^{きれい}な刃^はを日に翳^{かざ}して、友^{とも}達^{だち}に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。

切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。

そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの

通りだと右の手の親指の甲^{こう}をはすに切り込^こんだ。幸^{さい}ナイフが小^{さい}さ

いのと、親指の骨^{かた}が堅^{かた}かつたので、今だに親指は手に付いている。

しかし創^{きず}痕^{あと}は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽^{つく}すと、南上がりにいささかばかりの菜

園があつて、真^ま中^{んなか}に栗^{くり}の木が一本立っている。これは命より大

事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸^{せど}を出て落ちた奴を拾

ってきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋やましろうやという質屋の庭続きで、この質屋に勘太郎かんたろうという十三四の倅せがれが居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖くせに四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みぬすにくる。ある日の夕方折戸おりどの蔭かげに隠かくれて、とうとう勘太郎を捕つらまえてやった。その時勘太郎は逃にげ路みちを失うつて、一生懸命いっしょうけんめいに飛びかかつてきた。向むうは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢はちの開いた頭を、こっちの胸むねへ宛あててぐいぐい押おした拍子ひょうしに、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷あわせの袖そでの中にはいった。邪魔じゃまになつて手が使えぬから、無暗ふに手を振ふつたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左うでへぐらぐら靡なびいた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕うでへ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつ

けておいて、足^{あし}捌^{がら}をかけて向うへ倒^{たお}してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩^{くず}して、自分の領分へ真逆^{まつさかさま}様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫^わびに行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公^{かねこう}と肴屋^{さかなや}の角^{かく}をつれて、茂作^{もさく}の人参^{にんじん}畠^{ばたけ}をあらした事がある。人参の芽が出揃^{でそろ}わところ^{ところ}わらぬ処へ藁^{わら}が一面に敷^しいてあつたから、その上で三人が半日相撲^{すもう}をとつづけに取つたら、人参がみんな踏^ふみつぶされてしまった。古川^{ふるかわ}の持つている田圃^{たんぼ}の井戸^{いど}を埋^うめて尻^{しり}を持ち込まれた事もある。太い孟宗^{もうそう}の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧^わき出て、

そこいらの稲いねにみずがかかる仕掛しかけであつた。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ぼうちぎれをぎゆうぎゆう井戸の中へ挿さし込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食つていたら、古川が真赤まっかになつて怒鳴り込んで来た。たしか罰金ばつぎんを出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛かわいがつてくれなかつた。母は兄ばかり鼻屑ひいきにしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居しばいの真似まねをして女おんながた形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。

ただ懲役ちようえきに行かないで生きてゐるばかりである。

母が病気で死ぬにさんち二三日前にさんち台所で宙返りをしてへつついの角で肋あばららほね

骨ほねを撲うつて大いに痛かつた。母が大層怒おこつて、お前のような

ものの顔は見たくないと云うから、親類へ泊とまりに行つていた。す

るととうとう死んだと云う報知しうせが来た。そう早く死ぬとは思わな

かつた。そんな大病なら、もう少し大人おとなしくすればよかつたと思

つて歸つて来た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのた

めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜くやしかつたから、

兄の横つ面を張つて大變叱しかられた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮くらしていた。おやじは

何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だめだ駄目だと口癖の

ように云っていた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしきりに英語を勉強していた。元来女のような性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしていた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手に在った飛車を眉間へ擲きつけてやった。眉間が割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言ひ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という下女が、泣きながらおやじに詫ま^{あや}つて、ようやくおやじの怒りが解けた。それに

もかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかった。かえってこの清と云う下女に気の毒であつた。この下女はもと由緒のあるものだつたそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういふ因縁か、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとききらめていたから、他人から木の端のうに取り扱われるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居な

い時に「あなたは真^まつ直^{すぐ}でよいご気性だ」と賞^ほめる事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好^いい気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌^{きら}いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好^いいご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺^{なが}めている。自分の力でおれを製造して誇^{ほこ}つてるように見える。少々気味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃^よせばいいのと思つた。気の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣^{こづか}いで金^{きん}鍰^{つば}や紅梅^{こうばい}焼^{やき}を買つてくれる。寒い夜

などはひそかに蕎麦粉そばこを仕入れておいて、いつの間にか寝ねている
枕まくらもと元へ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼なべやき餛飩うどんさえ買
つてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋くつたびももらった。鉛え
筆んぴつも貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を
三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではな
い。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしょう、
お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云った
が、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。
その三円を蝦蟇口がまぐちへ入れて、懐ふところへ入れたなり便所へ行ったら、す
ぽりと後架こうかの中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出
てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を

捜^{さが}して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端^{いどばた}で
 ざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇^{ひも}口の紐^{ひも}を引き懸^か
 けたのを水で洗っていた。それから口をあけて壺^{いっせんさつ}円札^{えんさつ}を改めた
 ら茶色になつて模様が消えかかつていた。清は火鉢^かで乾^{かわ}かして、
 これでいいでしょうと出した。ちよつとかいでみて臭^{くさ}いやと云つ
 たら、それじやお出^でしなさい、取り換^かえて来て上げますからと、
 どこでどう胡魔^{ごま}化^かしたか札の代りに銀貨を三円持つて来た。この
 三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、
 返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。
 清が物をくれる時には必ずおやじも居ない時に限る。おれ
 は何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事

はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣^やらないのかと清に聞く事がある。すると清は澄^{すま}したものでお兄^{あにいさま}様はお父^{とうさま}様が買つてお上げなさるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固^{がんこ}だけれども、そんな依怙^{えこ}鼻^{ひいき}負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺^{おぼ}れていたに違^{ちが}いがない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。鼻負目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると思ひ込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆

さんに逢^あつては叶^{かな}わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了^{りようけん}見もなかった。しかし清がなるなると云うものだから、やつぱり何かに成れるんだらうと思つていた。今から考えると馬鹿^{ばか}馬鹿^{ばか}しい。ある時などは清にどんなものになるだらうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車^{てぐるま}へ乗つて、立派な玄関^{げんかん}のある家をこしらえるに相違^{そうい}ないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一^{いっしよ}所になる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰^くり返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だ

けはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこが好き、こうじまち麴町ですか麻布あざぶですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並ならべていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館も日本建にほんだても全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思つていた。ほかの

小供も一いちがい概にこんなものだろうと思つていた。ただ清が何かにつけて、あなたは可かわい哀想だ、不仕合だと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家売つて財産を片付けて任地へ出立しゅったつすると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかい。

になる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極きまっている。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覚悟かくごをした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売った。家屋敷いえやしきはある人の周しゅう旋うせんである金満家に譲った。この方は大分金になったようだが、詳しい事くわは一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町おがわまちへ下宿していた。清は十年居たうちが人手に渡わたるのを大いに残念がったが、自分のものでないから、仕様がなかった。あなたがもう少し年をとっていらっしやれば、ここがご相続が出来ますものとしきりに口説いて

いた。もう少し年をとって相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困ったのは清の行く先である。

兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっついて九州下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四疊よじよう半はんの安下宿に籠こもつて、それすらもいざとなれば直ちに引き払はらわ

ねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持って、奥さまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥おいの厄介になりましょうとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記で

まず今日には差支^{さしつか}えなく暮していたから、今までも清に来るな
ら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年来
住み馴^なれた家^{うち}の方がいいと云つて応じなかった。しかし今の場合
知らぬ屋敷へ奉公^{ほうこう}易えをして入らぬ氣^{きが}兼^ねを仕直すより、甥の厄
介になる方がましだと思つたのだろう。それにしても早くうちを
持ての、妻^{さい}を貰^{もら}えの、来て世話をするのと云う。親身^{しんみ}の甥よりも
他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本
にして商^{しょう}買^{ばい}をするなり、学資にして勉強をするなり、どうで
も随意^{ずい}に使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にし
ては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰^{もら}わんでも困りはせんと

思ったが、例に似ぬたんぱく淡泊な処置が気に入ったから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたつて面倒くさくつてめんど旨く出来るものじゃなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。

それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生しょうらい来らいどれ
もこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真まつ平びら
ご免めんだ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。
どうせ嫌いなものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物
理学校の前を通り掛かつたら生徒募集の広告が出ていたから、何も
縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手續きをしてしまった。
今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起おこつた失策だ。

三年間まあ人ひと並なみに勉強はしたが別段たちのいい方でもないか
ら、席順はいつでも下から勘かん定じようする方が便利であつた。しか
し不思議なもので、三年立つたらとうとう卒業してしまった。自
分でも可笑おかしいと思つたが苦情を云う訳もないから大人しく卒業

しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思つて、出掛けて行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましようと思つて即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟つたのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた。しかし

こうなると四畳半も引き払わなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉^{かまくら}へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々面倒臭い。

家を畳^{たた}んでからも清の所へは折々行つた。清の甥^{もへ}というのは存外結構な人である。おれが行く^{ゆく}たびに、居^おりさえすれば、何くれと款待^{もて}なしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自^じ慢^{まん}を甥^{もへ}に聞かせた。今に学校を卒業すると麴町^{まがど}辺へ屋敷を買つて

役所へ通うのだなどと吹聴した事もある。独りで極めて一人で喋舌るから、こつちは困まつて顔を赤くした。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三畳に風邪を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き直るが早い、坊っちゃんいつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思

っている。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うち持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢ごましおびんの乱れをしきりに撫なでた。あまり氣の毒だから「行く事ゆは行くがじき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」と慰なぐさめてやった。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹えちご飴ささあめが食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どっちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱は根こねのさきですか手前ですか」と問う。随分持てあました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中
小間物屋で買って来た齒磨はみがきと楊子ようじと手拭てぬぐいをズツクの革鞆かばんに入
れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。
車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車
へ乗り込んだおれの顔をじつと見て「もうお別れになるかも知れ
ません。随分ご機嫌きげんよう」と小さな声で云つた。目に涙なみだが一杯いっぱい
たまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣くところ
であつた。汽車がよつぽど動き出してから、もう大丈夫だいじょうぶだろ
うと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やつぱり立つて
いた。何だか大変小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、舢舨が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見つめていても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森ぐらいな漁村だ。人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。続づいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱を四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して来た。陸へ着いた時も、いの一に飛び上がった、いきなり、

磯^{いそ}に立っていた鼻たれ小僧^{こぞう}をつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云った。気の利かぬ田舎^{いなか}ものだ。猫^{ねこ}の額^{ぬか}ほどな町内の癖^{くせ}に、中学校のありかも知らぬ奴^{やつ}があるものか。ところへ妙^{みょう}な筒^{つつ}つぼうを着た男がきて、こっちへ来いと言うから、尾^ついて行ったら、港屋とか云う宿屋へ連れて来た。やな女が声^{こゑ}を揃^{そろ}えてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになった。門口へ立ったなり中学校を教えろと云ったら、中学校はこれから汽車で二里ばかり行かなくっちゃいけないと聞いて、なお上がるのがいやになった。おれは、筒^{つつ}つぼうを着た男から、おれの革靴^{かばん}を二つ引きたくつて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符きっぷも訳なく買った。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思ったら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思った。たった三銭である。それから車を備やとつて、中学校へ来たなら、もう放課後で誰も居ない。宿直はちよつと用達ようたしに出たと小使こづかいが教えた。随分ずいぶん気楽な宿直がいるものだ。校長でも尋ねたずようかと思つたが、草臥くたびれたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋やましろやと云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎かんたろうの屋号と同じだからちよつと面白く思つた。

何だか二階の櫓子段はしごだんの下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居

られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞ふさがつておりますからと云いながら革鞆かわづを抛ほうり出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗あせをかいて我慢がまんしていた。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がった。帰りがけに覗のぞいてみると涼すずしそうな部屋がたくさん空ぞんいている。失敬な奴だ。嘘うそをつきやあがつた。それから下女が膳ぜんを持って来た。部屋は熱あつかったが、飯は下宿のよりも大分うま旨うまかった。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から来たと答えた。すると東京はよい所でございましょうと云つたから当り前あただと答えてやった。膳を下げた下女が台所へいった時分、大きな笑い声きこが聞えた。くだらないから、すぐ寝ねたが、

なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしやむしや食っている。笹は毒だからよしたらよかろうと云うと、いえこの笹がお薬でございますと云つて旨そうに食っている。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハハハと笑つたら眼が覚めた。下女が雨戸を明けている。相変らず空の底が突き抜けたような天気だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやるまいと粗末に取り扱われると聞いていた。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらないせいだろう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛繻子の蝙蝠傘を提げてるからだろう。

田舎者の癖に人を見括みくびつたな。一番茶代をやつて驚おどろかしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐ふところに入れて東京を出て来たのだ。汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰もらうんだから構まわない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚おどろいて眼まわを廻まわすに極きまつてゐる。どうするか見ろと済すまして顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、夕べの下女が膳ぜんを持つて来た。盆ぼんを持つて給仕をしながら、やににやにや笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。これでもこの下女の面つらよりよつぽど上等だ。飯を済ちゆうとましてからにしようと思つていたが、癩しやくさわに障さわつたから、中途ちゆうとで五円札さつを一枚まい出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと

云つたら、下女は変な顔をしていた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸でかけた。靴は磨みがいてなかった。

学校は昨日車きのうで乗りつけたから、大概たいがいの見当は分つている。

四つ角を二三度曲がったらすぐ門の前へ出た。門から玄関げんかんまでは御影石みかげいしで敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらが

らと通つた時は、無暗むやみに仰ぎようさん山な音がするので少し弱つた。途

中から小倉こくらの制服を着た生徒にたくさん逢あつたが、みんなこの門をはいつて行く。中にはおれより背が高くって強そうなのが居る。

あんな奴を教えるのかと思つたら何だか氣味が悪わるくなつた。名め刺いしを出したら校長室へ通した。校長は薄髯うすひげのある、色の黒い、目の大きな狸たぬきのような男である。やにもつたいぶつていた。まあ

精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺^{おさ}つた、辞令を渡^{わた}した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛^なり込んでしまった。校長は今に職員に紹^{しょうかい}介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒^{めんどう}な事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控^{ひかえじよ}所^{ところ}へ揃^{そろ}うには一時間目の喇叭^{らっぱ}が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追^{おい}々^{おい}ゆるりと話すつもりだが、まず大体の事を呑^のみ込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来た

と思った。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような
無鉄砲むてっぽうなものをつらまえて、生徒の模範もはんになれの、一校の師しひよ
表うと仰あおがれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化を及およぼさ
なくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そん
なえらい人が月給四十円で遙はるばる々こんな田舎へくるもんか。人間
は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩けんかの一つぐらいは誰でもするだ
ろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、散歩も
出来ない。そんなむずかしい役なら雇やとう前にこれこれだと話すが
いい。おれは嘘うそをつくのが嫌きらいだから、仕方がない、だまされて
来たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断ことわつて帰つちま
おうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布さいふの中には九円なにがし

しかない。九円じゃ東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかった。惜おしい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、
到底とうていあなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つたら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知っているから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇おどきさなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたらうと云うから、校長に尾いて

教員控所へはいった。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰こしをかけている。おれがはいったのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶あいさつをした。大概たいは椅子いすを離れて腰をかがめるばかりであつたが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭しく返へんきやく却かえした。まるで宮芝居の真似まねだ。十五人目に体操たいそうの教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作しよさを十五返繰り返している。少しはひとの了りようけん見も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学

士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。^{みよう}妙に女のような優しい声を出す人だった。もつとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣^{しやつ}を着ている。いくら薄^{うす}い地には相違^{そくい}なくつても暑いには極つてゐる。文学士だけに苦勞^{くろう}千萬な服装^{ふくそう}をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿^{ばか}にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病気があつた者だ。当人の説明では赤は身体^{からだ}に薬になるから、衛生のためにわざわざ誂^{あつ}らせるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴^{はかま}も赤にすればいい。それから英語の教師に古賀^{こが}とか云う大變顔色の悪^{わる}い男が居た。大概顔の蒼^{あお}い人は瘡^やせてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔^{むかし}小学

校へ行く時分、浅井あさいの民さんたみと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百ひやく姓しょうだから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子とうなすばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬むくいだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてるに違ちがいがない。もつともうらなりとは何の事か今もって知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかった。大方清も知らないんだろう。それからおれと同じ数学の教師に堀田ほったというのが居た。これは逞たくましい毬栗坊いぐりぼうずで、叡山えいざんの悪僧あくそうと云うべき面構つらがまえである。人が町寧ていねい

に辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊び
 に来給え^{きたま}アハハハと云った。何がアハハハだ。そんな礼儀^{れいぎ}を心得

ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主^{やま}に
 ぬ奴の所へ遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主^{やま}に

山嵐^{やまあらし}という渾名^{あだな}をつけてやった。漢学の先生はさすがに堅い^{かた}

ものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始め
 で、大分ご励精^{れいせい}で、——とのべつに弁じたのは愛嬌^{あいきよう}のある

お爺さん^{じい}だ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾^{すきや}の羽

織を着て、扇子^{せんす}をぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東

京？ そりや嬉しい^{うれ}、お仲間が出来て……私^{わたし}もこれで江戸っ子で^{えど}

すと云った。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもん

だと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けば

いくらでもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取ってもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明後日あさから課業を始めてくれと云った。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であつた。忌々いまいましい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君どこに宿とまつてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨はくぼくを持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、歸つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思つて、無暗に

足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵營も見た。麻布あさぶの聯隊れんたいより立派でない。大通りも見た。かぐらざか神楽坂を半分に狭くしたぐらいな道幅みちはばで町並まちなみはあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下だなどと威張いばつてる人間は可哀想かわいそうなものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵たいていは見尽みつくしたのだろう。帰つて飯でも食おうと門口くちをはいった。帳場すわに坐つていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきたお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴くつを脱ぬいで上がると、お座敷ざしきがあきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳じようの表二階で大きな床とこの間まがついている。おれは生れてから

まだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつはいれるか分らないから、洋服を脱いで浴衣ゆかた一枚になつて座敷の真中まんなかへ大の字に寝てみた。いい心持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙を書いてやつた。おれは文章がまずい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌だいきらいだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかなどと思つちや困るから、奮ふんぱつ発して長いのを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝ている。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかった。清が笹飴を笹ごと食う夢を見た。来年の夏は

帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠氣ねむけがさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐつすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいつて来た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼ろうば狽いした。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は愚おろか、明日あしたから始めると云つたつて驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君は

いつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕ぼくがいい下宿を

周しゅうせん旋せんしてやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕

が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでいる。

なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな

宿しゅくりよう料はらに払つても追つかないかもしれぬ。五円の茶代を奮ふんば

発つしてすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引

き越こして落ち付く方が便利だから、そこのところはよろしく山嵐

に頼たのむ事にした。すると山嵐はともかくもいつしよに来てみると

云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静かんせいだ。

主人は骨董こつどうを売買するいか銀と云う男で、女房にようぼうは亭主ていしゅよ

りも四つばかり年とし嵩かさの女だ。中学校に居た時ウィッチと云う言葉を習った事があるがこの女房はまさにウィッチに似ている。ウィッチだつて人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐おうふうは通とおりちちようょう町で氷水を一杯ぱい奢いつた。学校で逢つた時はやに横風おうふうな失敬な奴だと思つたが、こんなにいろいろ世話をしてくれるところを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつかちで肝癪かんしやくもち持らしい。あとで聞いたらこの男が一番生徒に人望があるのだそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいつて高い所へ乗った時は、何だか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思った。生徒はやかましい。時々図^ず抜けた大きな声で先生と云う。先生には応^{こた}えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥^{うんでい}の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯^{ひきよう}な人間ではない。臆^{おくびよ}病^うな男でもないが、惜^おしい事に胆^{たん}力^{りよく}が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減った時に丸の内^{どん}で午砲^{どん}を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかい加減にやってしまった。しかし別段困った質問も掛^かけられずに済んだ。控^{ひかえ}所^{じよ}へ帰つて来たら、山嵐がどうだいと聞いた。うんと単簡に返事をしたら山

嵐は安心したらしかった。

二時間目に白墨はくぼくを持って控所を出た時には何だか敵地へ乗り込こむような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴やつばかりである。おれは江戸えどつ子で華奢きやしやに小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がったても押しが利かない。喧嘩けんかなら相撲取すもうとりとでもやってみせるが、こんな大僧おおぞうを四十人も前へ並べて、ただ一枚まいの舌をたたいて恐きようしゆく縮くさせる手際はない。しかしこんな田舎いなかものの舎者に弱身を見せると癖くせになると思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやった。最初のうちは、生徒も烟けむに捲まかれてぼんやりしていたから、それ見ろとますます得意になつて、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中まんなかに居た、

一番強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そら来たと思
いながら、何だと聞いたら、「あまり早くて分からんけれ、もち
つと、ゆるゆる遣^やつて、おくれんかな、もし」と云った。おくれ
んかな、もしは生^{なまぬ}温るい言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つて
やるが、おれは江戸っ子だから君^{きみ}等の言葉は使えない、分^{わか}らなけ
れば、分るまで待つてゐるがよいと答えてやった。この調子で二時
間目は思ったより、うまく行つた。ただ歸りがけに生徒の一人が
ちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そう
もない幾^き何^かの問題を持つて逼^{せま}つたには冷^{ひや}汗^{あせ}を流した。仕方がな
いから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚^あげたら、
生徒がわあ^{はや}と囃^{はや}した。その中に出来ん出来んと云う声^{こゑ}が聞える。

篋べらぼう棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。出来ないのを

来ないと云うのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ歸つて来た。今度はどうだとまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは気が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやった。山嵐は妙みような顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。

最初の日に出た級は、いずれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見ると、三時までぽつ然ねんとして待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除そうじして報知しらせにくるから検分

をするんだそうだ。それから、出席簿しゅつせきぼを一応調べてようやくお暇ひまが出る。いくら月給で買われた身体からだだって、あいた時間まで学校へ縛りしばつけて机と睨めにらつくらをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人おとなしくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねこるのもよろしくないと思つて我慢がまんしていた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過すぎまで学校にいさせるのは愚おろかだぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから真面目まじめになつて、君あまり学校の不平を云うと、いかなぜ。云うなら僕ぼくだけに話せ、随分ずいぶん妙な人も居るからなと忠告がましい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事くわは聞くひまがなかつた。

それからうちへ歸つてくると、宿の亭主ていしゅがお茶を入れましょ
うと云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走ちそうをするの
かと思うと、おれの茶を遠慮えんりよなく入れて自分が飲むのだ。この
様子では留守るすちゆう中も勝手にお茶を入れましょを一人で履行りこうして
いるかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董しやがこつとうがすきで、
とうとうこんな商買を内々で始めるようになりました。あなたも
お見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ちと道楽
にお始めなすつてはいかがですと、飛んでもない勧誘かんゆうをやる。
二年前ある人の使つかいに帝國ホテルへ行つた時は錠前じようまえ直しと間ま
違ちがえられた事がある。ケツトを被かぶつて、鎌倉かまくらの大仏を見物した
時は車屋から親方と云われた。その外今日こんにちまで見損みそくなわれた事

は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵^{たいてい}はなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画^えを見ても、頭巾^{ずきん}を被^{かぶ}るか短冊^{たんざく}を持つてゐるものだ。このおれを風流人だなどと真面目に云うのはただの曲^く者^{せもの}じやない。おれはそんな呑氣^{のんき}な隠居^{いんきよ}のやるような事は嫌^{きら}いだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、いったんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付^{てつき}をして飲んでゐる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼^{たの}んでおいたのだが、こんな苦い濃^こい茶はいやだ。一杯^{ぱい}飲むと胃に答えるような氣がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたと

また一杯しばって飲んだ。人の茶だと思つて無暗^{むやみ}に飲む奴^{やつ}だ。主人が引き下がってから、明日の下^{した}読^{よみ}をしてすぐ寝^ねてしまった。

それから毎日毎日学校へ出ては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましようとして出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大^{たい}概^{がい}は分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいの間は自分の評判がいいだろうか、悪^{わる}いだろうか非常に気に掛^かかるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかった。教場で折々^{さざ}しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗^{きれ}に消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒に

どんな影^{えいきよう}響^あを与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈^{てい}するかまるで無頓着^{むとんじやく}であつた。おれは前に云う通りあまり度胸^{すわ}の据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行く覚悟^{かくご}でいたから、^{たぬき}狸も赤シャツも、ちつとも恐^{おそ}ろしくはなかつた。まして教場の小僧^{こそう}共なんかには愛^{あい}嬌^{きよう}もお世辞も使う氣になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十^{とお}ばかり並^{なら}べておいて、みんなで三円なら安い物だお買いなさいと云う。田舎^{いなか}巡^{まわ}りのへボ絵師^かじやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華

山とか何とか云う男の花鳥の掛物かけものをもつて来た。自分で床の間とこまへかけて、いい出来じゃありませんかと云うから、そうかなと好い加減いかげんに挨拶あいさつをすると、華山には二人ふたりある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅ふくはその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促さいそくをする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようございますとなかなか頑固がんこだ。金があつても買わないんだと、その時は追つ払はらちまつた。その次には鬼おにがわら瓦わらぐらいな大おお硯すずりを担たんぎ込んだ。これは端溪たんけいです、端溪ですと二遍へんも三遍も端溪がるから、面白半分に端溪た何だいと聞いたたら、すぐ講釈を始め出した。端溪には上層中層下層とあつて、

今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼がんをご覧なさい。眼が三つあるのは珍めずらしい。澆墨はつぼくの具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突つきつける。いくらだと聞くと、持主が支那しなから持つて帰つて来て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょうと云う。この男は馬鹿ばかに相違そういない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董責こつとうぜめに逢あつてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町おおまちと云う所

を散歩していたら郵便局の隣となりに蕎麦そばとかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居おつた

時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香においをかぐと、どうしても暖簾のれんがくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどもない。東京と断ことわる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅めつぼう法ぽうきたない。晝たみは色いろが變つてお負けに砂でざらざらしている。壁かべは煤すすで真黒だ。天井てんじやうはランプの油煙ゆえんで燻くすぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買つて二三日にさんち前から開業したに違ちがひなからう。ねだん付の第一号に天麩羅てんぷらとある。おい天

麩羅を持ってこいと大きな声を出した。するとこの時まで隅^{すみ}の方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連^{れんじゅ}中^{うち}が、ひとしくおれの方を見た。部屋^{へや}が暗いので、ちよつと氣がつかなくつたが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶^{あいさつ}をしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振^{ひさぶり}に蕎麦を食つたので、旨^{うま}かつたから天麩羅を四杯^{たいら}平げた。

翌日何の氣もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑^{おか}しいかと聞いた。すると生徒の一人^{ひとり}が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文

句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ歸つて来た。十分立つて次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板にかいてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癩しやくさわに障さわつた。冗談じようだんも度を過すごせばいたずらだ。焼餅やきもちの黒焦くろこげのようなもので誰だれも賞ほめ手はない。田舎者はこの呼吸が分らないからどこまで押おして行つても構かまわないと云う了り。見けんだろう。一時間あるくと見物する町もないような狭せまい都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触ふれちらかすんだらう。憐あわれな奴等やつらだ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢うえきばちの楓かえでみたような小しょうじ人んが出来るんだ。無邪氣むじゃきならいつしよに笑つてもいいが、こり

やなんだ。小供の癖くせに乙おつに毒氣を持つてゐる。おれはだまつて、天
麤羅を消して、こんないたずらが面白いか、卑怯ひきような冗談だ。君
等は卑怯と云う意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を
笑われて怒おこるのが卑怯じやろうがな、もしと答えた奴がある。や
な奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに來たのかと思つた
ら情なくなつた。余計な減らず口を利かないで勉強しろと云つて、
授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麤羅を食う
と減らず口が利きなくなるものなりと書いてある。どうも始末に
終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意氣な奴は教えな
いと云つてすたすた歸つて來てやつた。生徒は休みになつて喜ん
だそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麴羅蕎麦もうちへ帰つて、一晚寝たらそんなに肝癰かんしやくに障
 らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出ている。何だか訳が
 分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に
 住田すみたと云う所へ行つて団子だんごを食つた。この住田と云う所は温泉の
 ある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、
 料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廊ゆうかくがある。おれのはいつ
 た団子屋は遊廊の入口にあつて、大変うまいという評判だから、
 温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢
 わなかつたから、誰だれも知るまいと思つて、翌日学校へ行つて、一
 時間目の教場へはいると団子二皿さくら七銭と書いてある。実際おれは
 二皿食つて七銭はら払つた。どうも厄介やっかいな奴等だ。二時間目にもき

つと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返った奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭あかてぬぐいと云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極きめている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及およばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく来た者だから毎日はいつてやろうという気で、晩飯前に運動かたがた出掛でかける。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染そまつた上へ、赤い縞しまが流れ出したのでちよつと見ると紅べにいろ色に見える。おれはこの手拭を行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。

どうも狭い土地に住んでとうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣ゆかたをかして、流しをつけて八錢で済む。その上に女が天目てんもくへ茶を載のせて出す。おれはいつでも上等へはいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅ぜい沢たくだと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺ゆつぽは花崗石みかげいしを畳たたみ上げて、十五畳じようじき敷敷ぐらいの広さに仕切つてある。大抵たいていは十三四人漬つかつてゐるがたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快ゆかいだ。おれは人の居ないのを見済みすましては十五畳の湯壺を泳ぎ巡まわつて喜んでいた。ところがある日三階から威勢いせいよく下りて今日も泳げるかなとぎくろ口を覗のぞいてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳

ぐべからずとかいて貼^はりつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼^{はり}札^{ふだ}はおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚^{おど}ろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探^{たんでい}偵しているように思われた。くさくさした。生徒が何を云ったって、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董賣である。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し^{たぬき}狸と赤シャツは例外である。何でこの兩人が当然の義務を免かれ^{まぬ}るのかと聞いてみたら、奏^{そう}任^{にん}待^{たい}遇^{ぐう}だからと云う。面白くもない。月給はたくさんとる、時間は少ない、それで宿直を逃^のがれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当^{あた}り前^{まえ}だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山^{やま}嵐^{あらし}の説によると、いくら一人^{ひとり}で不平を並べたつて通るものじゃないそう^{ふたり}だ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は might is right という英語を引いて説^{せつ}諭^ゆを加えたが、何だか要

領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそう
だ。強者の権利ぐらいなら昔から知っている。今さら山嵐から講
釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や
赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論とし
てこの宿直がいよいよおれの番に廻つて来た。一体痼性だか
ら夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持が
しない。小供の時から、友達のうちへ泊つた事はほとんどない
ら이다。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭
だけでも、これが四十円のうちへ籠っているなら仕方がない。
我慢して勤めてやろう。

教師も生徒も帰ってしまったあとで、一人ぽかんとしているの

は随ずい分ぶん間かんが抜ぬけたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちよつとはいって見たが、西日をまともに受けて、苦しくつて居たたまれない。田舎いなかだけあつて秋がきても、気長に暑いもんだ。生徒の賄まかないを取りよせて晩飯を済ましたが、まづいには恐おそれ入いった。よくあんなものを食つて、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまうんだから豪傑ごうけつに違ちがひない。飯は食ったが、まだ日が暮くれないから寝ねる訳に行かない。ちよつと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪わるい事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮じゅうきんこ同様な憂目うきめに逢あうのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたら、ちよつと用達ようたし

に出たと小使こづかいが答えたのを妙みょうだと思つたが、自分に番が廻まわつてみると思い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちよつと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用じやない、温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛でかけた。赤手あかてぬぐい拭は宿へ忘れて来たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいったりして、ようやく日ひ暮ぐれ方がたになつたから、汽車へ乗つて古町こまちの停車場ていしやばまで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が来た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやってきたが、擦すれ違ちがつた時おれの顔を見たから、ちよつと挨拶あいさつをした。すると狸はあなたは今

日は宿直ではなかったですかねえと真面目まじめくさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから歸つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。豎たてま町の四つ角までくると今度は山やま嵐あらしに出つ喰くわした。どうも狭せまい所だ。出であるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗むやみに出てあるくなんて、不都合ふつごうじやないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出であるかない方が不都合だ」と威張いばつ

てみせた。「君のずぼらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたった今逢った。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしよう」と校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと学校へ歸つて来た。

それから日はすぐくれる。くれてから二時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろと思つて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときにとんと尻持をつくのは小供の時から癖だ。わるい癖だと云つて小川町おがわまちの下宿に居た時分、二階下に居た法律

学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚^ぐな事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻^{しり}がわるいのじゃない。下宿の建築が粗末^{そまつ}なんだ。掛^かケ合うなら下宿へ掛^かケ合えと凹^{へこ}ましてやった。この宿直部屋は二階じゃないから、いくら、どしんと倒^{たお}れても構^{かま}わない。なるべく勢^{いきおい}よく倒れないと寝たような心持^{こころもち}がしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤^{のみ}のようでもないからこいつあと驚^{おど}ろいて、足を二三度毛布^{けつと}の中で振^ふつてみた。するとざらざらと当^あつたものが、急に殖^ふえ出して脛^{すね}が五六力所、股^{もも}が二三力所、尻の下でぐちやりと踏^ふみ潰^{つぶ}したのが一つ、臍^{へそ}の所まで飛び上がった

のが一つ——いよいよ驚ろいた。早速^{さつそく}起き上^{あが}つて、毛布^{けつと}をぱつと後ろへ抛^{ほう}ると、蒲団の中から、バツタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味が悪^{わる}るかつたが、バツタと相場が極^きまつてみたら急に腹が立つた。バツタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括^{くく}り枕^{まくら}を取つて、二三度擲^たきつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛^なげつける割に利目^{ききめ}がない。仕方がないから、また布団の上へ坐^{すわ}つて、煤^{すす}掃^{はき}の時に塵^{ごご}を丸めて畳^{たた}を叩くように、そこら近辺を無暗にたたいた。バツタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩^{かた}だの、頭^{あたま}だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴^{やつ}は枕で叩く訳に行かないから、手で攫^{つか}んで、一生懸命に擲^なきつける。

忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手筈がない。バツタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまっている。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバツタは退治した。箒を持って来てバツタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バツタを床の中に飼つとく奴がどこの国にある。間拔めと叱つたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰って行つた。

おれは早速寄宿生を三人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て来た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕

まくりをして談判を始めた。

「なんでバツタなんか、おれの床の中へ入れた」

「バツタは何ぞな」と真^{まつさき}先の一人がいった。やに落ち付いてい

やがる。この学校じゃ校長ばかりじゃない、生徒まで曲りくねった言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云ったが、生^{あいにく}憎掃き出してしまつて一匹^{ぴき}も居ない。また小使を呼んで、

「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃^{はきだめ}溜^すへ棄ててしまいましたが、拾つて参りましょうか」と聞いた。「うん

すぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳^かけ出したが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載^のせて来て「どうもお氣の毒ですが、生憎夜

でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿^{ばか}だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意氣におれを遣^やり込^こめた。

「篋^{べらぼう}棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕^{つち}まえてなもした何だ。菜飯^{なめし}は田^{でん}楽^{がく}の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯とは違^{ちが}うぞな、もし」と云った。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼^{たの}んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温ぬくい所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじやあろ」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等やつらだ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証しょうこ拠よさえ挙がらなければ、しらを切るつもりで図太く構えていやがる。おれだって中学に居た時分は少しは

いたずらもしたもんだ。しかしだれがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯ひきような事はただの一度もなかった。したものはしたので、しないものはしないに極きまつてゐる。おれなんぞは、いくら、いたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐ついて罰ばつを逃にげるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免めんこうむ蒙もうるなんて下劣げれつな根性がどこの国に流行はやると思つてゐるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違そういない。全体中学校へ何しにはいつてゐるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔ごま化かして、陰かげでこせこせ生意氣な悪いたずらをして、そうして大きな面

で卒業すれば教育を受けたもんだと癪^{かんちが}違いをしていやがる。話せない雑^{ぞうひよう}兵だ。

おれはこんな腐^{くさ}つた了^{りようけん}見の奴等と談判するのは胸^{むなくそ}糞^がが悪^わいから、「そんなに云われなきや、聞かなくっていい。中学校へはいって、上品も下品も区別が出来ないのは気の毒なものだ」と云つて六人を逐^おつ放^{ばな}してやつた。おれは言葉や様子こそあまり上品じゃないが、心はこいつらよりも遥^{はる}かに上品なつもりだ。六人は悠^{ゆうゆう}々と引き揚^あげた。上部^{うわべ}だけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪^{わる}い。おれには到底^{とうてい}これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さっきの騷^{そうどう}動^{どう}で蚊

帳の中はぶんぶん唸うなっている。手燭てしよくをつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手つりてをはずして、長く畳たたんでおいて部屋の中で横よこたて 縦たて 十文字に振ふるつたら、環かんが飛んで手の甲こうをいやというほど撲ぶつた。三度目に床へはいった時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行っても、こんなものを相手にするなら気の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よつぽど辛しんぼう 防強ぼうきやうい朴念仁ぼくねんじんになるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清きよなんてのは見上げたものだ。教育もない身分もない婆ばあさんだが、人間としてはすこぶる尊たつとい。今まではあんなに世話になって別段難ありがた有あいとも思わなかったが、

こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後えちごの笹ささ飴あめが食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやつても、食わせるだけの価値は充じゅう分ぶんある。清はおれの事を欲がなくなつて、真ま直すな気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突とつ然ぜんおれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあろうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍ひょう子しを取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨ときの声おこが起つた。おれは何事が持ち上がったのかと驚ろいて飛び起きた。飛び起きる途端とたんに、ははあ

さつきの意趣返しに生徒があばれるのだなと気がついた。手前
 のわるい事は悪るかつたと言つてしまわないうちは罪は消えない
 もんだ。わるい事は、手前達に覚があるだろう。本来なら寝てか
 ら後悔こうかいしてあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、
 あやまらないまでも恐れ入つて、静せいしゆく肅ぶたに寝ているべきだ。そ
 れを何だこの騒さわぎは。寄宿舎を建てて豚ぶたでも飼つておきあしまい
 し。氣狂きちがいじみた真似まねも大抵たいていにするがいい。どうするか見ろと、
 寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段はしごだんを三股半みまたはんに二階ま
 で躍り上おどがつた。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしか
 にどたばた暴れていたのが、急に静まり返つて、人声どころか足
 音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、

暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人氣のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寢言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩なぞは、むくりと立ち上がつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかししたしかにあばれたに違いないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三

あと、三四十人の声がかたまつて響^{ひび}いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床^{ゆか}板^{いた}を踏み鳴らした。それ見る夢じやないやっぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳^かけだした。おれの通る路^{みち}は暗い、ただはずれに見える月あかりが目^め標^{じるし}だ。おれが馳^かけ出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅^{かた}い大きなものに向^む脛^{こうずね}をぶつけて、あ痛い^{ちきしょう}が頭へひびく間に、身体はすたと前へ抛^{ほう}り出された。こん畜^{ちきしょう}生と起き上がつてみたが、馳^かけられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれったいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森^{しん}としてゐる。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来る

ものじゃない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極めて寝室の一つを開けて中を検査しようと思ったが開かない。錠をかけてあるのか、机が何か積んで立て懸けてあるのか、押しても押しても決して開かない。今度は向う合せの北側の室を試みた。開かない事はやっぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引っ捕らまえてやろうと、焦慮すると、また東のはずれで鬨の声と足拍子が始まった。この野郎申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする気だな、とは思ったがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまうが、おれは勇氣のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていいかさっぱりわからない。わからな

いけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸えどつ子は意気地いきじがないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻はな垂なれ小僧こぞうにからかわれて、手のつけようがなくって、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちや一生の名折れだ。これでも元は旗本はたもとだ。旗本の元は清和源氏せいわけんじで、多田ただの満仲まんじゅうの後裔こうえいだ。こんな土百姓どびやくしやうとは生まれからして違うんだ。ただ智慧のないところが惜しいだけだ。どうしていいかわからないのが困るだけだ。困ったって負けるものか。正直だから、どうしていいかわからないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさって勝つ。あさって勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさって勝つ。あさって勝てなければ、あした勝つ。

ば、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかった。さつき、ぶつけた向脛を撫なでてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前つかの疲れが出て、ついうとうと寝てしまった。何だか騒さわがしいので、眼めが覚めた時はえっ糞くそしまったと飛び上がった。おれの坐すわつてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はっと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引ひつ攫つかんで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向あおもむけに倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちよつと狼狽ろうばい

したところを、飛びかかつて、肩を抑おさえて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾ついて来た。夜よはとうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰きつ問もんし始めると、豚は、打ぶつても擲ないても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す見と見えて、けっして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まってくる。見るとみんな眠ねむそうに瞼まぶたをはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗って議論に来いと云ってやったが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答おしもんどうをしてい
ると、ひよつくり狸がやって来た。あとから聞いたら、小使が学
校に騒動がありますって、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。
これしきの事に、校長を呼ぶなんて意気地がなさ過ぎる。それだ
から中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草いいぐさもちよつと
聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出ろ。早く顔
を洗つて、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろ
と云つて寄宿生をみんな放免ほうめんした。手温てぬるい事だ。おれなら即そ
席くせきに寄宿生をことごとく退校してしまう。こんな悠長ゆうちような事
をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、

あなたもさぞご心配でお疲れでしょう、今日はご授業に及およばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じやありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はやります、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂ちようだい戴だいした月給を学校の方へ割わり戻もどします」校長は何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面かゆ痒い。蚊がよつぽと刺さしたに相違ない。おれは顔中ぼりぼり掻かきながら、顔はいくら膨はれたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支つかえませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞ほめた。実を云うと賞めたんじや

あるまい、ひやかしたんだろう。

五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪い^わいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか^{わか}分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじゃ見つともない。

おれはそうですねあと少し進まない返事したら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、

小梅こうめの釣堀つりぼりで鮒ふなを三匹びき釣った事がある。それから神楽坂かぐらぎの毘び沙門しゃもんの縁日えんにちで八寸ばかりの鯉こいを針で引っかけて、しめたと思つたら、ぽちやりと落としてしまったがこれは今考えても惜おしいと云いつたら、赤シャツは顰あごを前の方へ突つき出してホホホと笑つた。何もそう氣取つて笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじゃ、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましよう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣りや猟りやうをする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺せつ生しょうをして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が楽に極きまつてる。釣きや猟りをしなくつちや活か計けいがたたないなら格別だが、何不足なく暮くらしている上に、生き

物を殺さなくっちゃ寝られないなんて贅ぜいたく沢な話だ。こう思ったが向むこうは文学士だけに口が達者だから、議論じゃ叶かなわないと思つて、だまつた。すると先生このおれを降参させたと疳かんちが違ちがいして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いつしよに行つちや。吉よしかわ川君と二人ふたりぎりじや、淋さむしいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういりようけんう了見けんだか、赤シャツのうちへ朝でいり夕出でいり入して、どこへでも随ずいこう行して行く。まるで同輩どうはいじやない。しゅうじゅう主従しゅうじゅうみたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極きまつてゐるんだから、今さら驚おどろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想ぶあいそのおれへ口を掛かけたんだらう。大方高慢こうまん

ちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもり
 かなんかで誘^{よそ}つたに違いない。そんな事で見せびらかされるおれ
 じゃない。鮪^{まぐろ}の二匹や三匹釣^つつたって、びくともするもんか。お
 れだって人間だ、いくら下手^{へた}だって糸^{いと}さえ卸^{おろ}しや、何かかかるだ
 ろう、ここでおれが行かないと、赤シャツの事だから、下手だか
 ら行かないんだ、嫌^{きら}いだから行かないんじゃないと邪^{じやすい}推^{おし}するに
 相違^{そうい}ない。おれはこう考えたから、行きましよう^{しやう}と答^{こた}えた。それ
 から、学校をしまつて、一応うちへ歸^{かえ}つて、支度^{したく}を整^{ととの}えて、停車
 場で赤シャツと野^のだを待ち合^あせて浜^{はま}へ行^いつた。船頭^{ふね}は一人^{ひとり}で、船
 は細^{ほそ}長い東京^{とうきょう}辺^へでは見た事もない恰^{かつ}好^{こう}である。さつきから船中
 見渡^{みわた}すが釣^{つり}竿^{ざお}が一本も見えない。釣竿^{つりざお}なしで釣^つが出来るものか、

どうする見だろうと、野だに聞くと、沖釣おきづりには竿は用いませ
ん、糸だけでげすと鰓なを撫なでて黒人くろうとじみた事を云った。こう遣や
り込こめられるくらいならだまっていればよかった。

船頭はゆつくりゆつくり漕こいでいるが熟練は恐おそろしいもので、見
返かえると、浜が小さく見えるくらいもう出ている。高柏寺こうはくじの五
重の塔とうが森の上へ抜ぬけ出して針のように尖とんがつてる。向側むこうがわを
見ると青嶋あおしまが浮あいている。これは人の住まない島だそうだ。よ
く見ると石と松まつばかりだ。なるほど石と松ばかりじゃ住めつこな
い。赤シャツは、しきりに眺望ちようぼうしていい景色だと云ってる。
野だは絶景でげすと云ってる。絶景だか何だか知らないが、いい
心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風ふに吹ふかれる

のは葉だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直まつすぐで、上が傘かさのように開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合ったらありませんね。ターナーそっくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙だまっていた。舟は島を右に見てぐるりと廻まわった。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいほど平たいらだ。赤シャツのお陰かげではなはだ愉快ゆかいだ。出来る事なら、あの島の上へ上がつてみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですかと聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立て

た。おれは黙ってた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようじやありませんかと余計な発議ほつぎをした。赤シャツはそいつは面白い、吾々われわれはこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいってるなら迷惑めいわくだ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いて。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじやないかホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫だいじょうぶですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑った。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那こだんなだろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよかろうが、人

に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえ
 ような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸わたくし えどつ子で
 すなどと云つてゐる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染なじみ染の
 芸者の渾名あだなか何かに違ひないと思つた。なじみの芸者を無人島の
 松の木の下に立たして眺ながめていれば世話はない。それを野だが油
 絵にでもかいて展覧会へ出したらよからう。

ここいらがいいだろうと船頭は船をとめて、錨いかりを卸した。幾いくひ
 尋ひろあるかねと赤シャツが聞くと、六尋むひろぐらいだと云う。六尋ぐ
 らいじゃ鯛たいはむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。
 大将鯛を釣る氣と見える、豪胆ごうたんなものだ。野だは、なに教頭けうとうの
 お手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いな

がら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錘おもりのような鉛なまりがぶら下がってるだけだ。浮うきがない。浮がなくつて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底とうてい出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあまるほどあるが、浮がありませんと云ったら、浮がなくつちや釣が出来ないのは素人しろうとですよ。こうしてね、糸が水底みずそこへついた時分に、船縁ふなべりの所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思ったら何にもかからない、餌えがなくなつてたばかりだ。いい気味きびだ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違いなかったんですが、どうも教頭のお

手際でさえ逃にげられちや、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨にらめくらをしている連中よりはましです。ちようど齒どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですからねと野みだは妙みな事ばかり喋しゃべ舌べる。よつぽど撲なぐりつけてやろうかと思った。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切った海じゃあるまいし。広い所だ。鰹かつおの一匹ぐらい義理にだつて、かかってくるだろうと、どぼんと錘と糸を抛ほうり込んでいい加減に指の先であやつっていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手たぐ繰り寄せた。

おや釣れましたかね、後世おそ恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸ひいておらん。船縁から覗のぞいてみたら、金魚のような縞しまのある魚が糸にくつついて、右左へ濠ただよいながら、手に応じて浮き上がってくる。面白い。水際から上げるとき、ぽちやりと跳はねたから、おれの顔は潮水だらけになった。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕つかまえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振ふって胴どうの間まへ擲たきつけたら、すぐ死んでしまった。赤シャツと野だは驚ろいて見ている。おれは海の中で手をぎぶぎぶと洗って、鼻の先へあてがってみた。まだ腥なまぐさ臭い。もう懲こり懲ごりだ。何が釣れたって魚は握にぎりたくない。魚も握られ

たくなかろう。そうそう糸を捲いてしまった。

いちばんやり

てがら

一番槍はお手柄だがゴルキじや、と野だがまた生意気を云う

ロシア

と、ゴルキと云うと露西亞の文学者みたような名だねと赤シャツ

しやれ

が洒落た。そうですね、まるで露西亞の文学者ですねと野だはす

ぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝しばの写真師

で、米のなる木が命の親だろう。一体この赤シャツはわるい癖くせだ。

だれ

つら

誰を捕まえても片仮名の唐とうじん人の名を並べたがる。人にはそれぞれ

れ専門があつたものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車し

やりき

力だか見当がつくものか、少しは遠慮えんりよするがいい。云うなら

フランクリンの自伝だとかプッシング、ツー、ゼ、フロントだと

か、おれでも知ってる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学

とかいう真赤な雑誌を学校へ持って来て難有ありがたそうに読んでいる。

やまあらし

山 嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌か

ら出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命いっしょうけんめいに釣っていたが、約一

時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。可笑おかしい事に釣れるの

ふたり

も、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつ

てもありやしない。今日は露西亜文学の大当りだと赤シャツが野

だに話している。あなたの手腕しゅわんでゴルキなんですから、私わたしなん

ぞがゴルキなのは仕方ありません。当り前ですなと野だが答え

ている。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、まずくつて、と

ても食えないんだそうだ。ただ肥料こやしには出来るそうだ。赤シャツ

と野だは一生懸命に肥料を釣っているんだ。気の毒の至りだ。おれは一匹びきで懲こりたから、胴の間へ仰向けあおむになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落しやれている。

すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清きよの事を考えている。

金があつて、清をつれて、こんな奇麗きれな所へ遊びに来たらさぞ愉快

だろう。いくら景色がよくつても野だなどといつしよじやつま

らない。清は皺しわ苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出

たつて恥はずかしい心持はしない。野だのようなのは、馬車に乗

ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣りょううんかくへのろうが、到底寄り付けた

ものじゃない。おれが教頭で、赤シャツがおれだったら、やっぱ

りおれにへけつけお世辞を使つて赤シャツを冷かすに違いない。
江戸っ子は軽薄だと云うがなるほどこんなものが田舎巡りを
して、私は江戸っ子でずっと繰り返していたら、軽薄は江戸っ子
で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思うに極まつてる。こんな
事を考えていると、何だか二人がくすくす笑い出した。笑い声の
間に何か云うが途切れ途切れでとんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」「……全くです……知らないんですから
……罪ですね」「まさか……」「バツタを……本当ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかったが、バツタと云う野だの
語を聴いた時は、思わずきつとなった。野だは何のためかバツタ
と云う言葉だけことさらに力を入れて、明瞭におれの耳にはい

るようにして、そのあとをわざとぼかしてしまった。おれは動かないでやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」ほった「そうかも知れない……」てんぷら「天麩羅……」
 ハハハハハ「……煽動せんどうして……」だんご「団子も？」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バツタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測ってみると、何でもおれのことについて内所話ないしょばなしをしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バツタだろうが雪踏せっただろうが、非はおれにある事じゃない。校長がひとまずあずけろと云ったから、狸たぬきの顔にめんじてただ今のところは控ひかえ

ているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆けふででもしやぶ
つて引つ込んでるがいい。おれの事は、遅おそかれ早かれ、おれ一人
で片付けてみせるから、差さしつか支えはないが、また例の堀田がとか
煽動してとか云う文句が氣にかかる。堀田がおれを煽動して騒そうど
動うを大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動
しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見てい
ると、日の光がだんだん弱つて来て、少しはひやりとする風が吹
き出した。線せんこう香けむりの烟のような雲が、透すき徹とおる底の上を静かに伸の
して行つたと思つたら、いつしか底の奥おくに流れ込んで、うすくも
やを掛かけたようになった。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちよ

うど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云つちやいけない、間違になると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エへへへ大丈夫ですよ。聞いたって……と野だが振り返った時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けてやった。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を搔いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艀の足で掻き分けられた浪の上を揺られながら漾つ

ていった。「君が来たんで生徒も大いに喜んでゐるから、奮発ふんぱつしてやつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故えんこもない事を云い出した。「あんまり喜んでもないでしょう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでゐるんです、ね、吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒おおさわぎです」と野だはにやにやと笑った。こいつの云う事は一々癩しやくに障るから妙だ。「しかし君注意しないと、険けん呑んのんですよ」と赤シャツが云うから「どうせ険呑です。こうなりや険呑は覚悟かくごです」と云つてやった。実際おれは免職めんしよくになるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どっちか一つにする了見でいた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のためを思うから云うんだが、わるく取つちや困

る」「教頭は全く君に好意を持ってるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願って、お互いに力になろうと思って、これでも蔭ながら尽力してるんですよ」と野だが人間並の事を云った。野だのお世話になるくらいなら首を縊って死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大変歓迎しているんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢だと思って、辛防してくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情だ、どんな事情です」

「それが少し込み入ってるんだが、まあだんだん分りますよ。僕

が話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入ってますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来るです」と野達は赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うんです」

「そりやごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云っておきましょう。

あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですがね

……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書りれきしょにもかいたきました

が二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思わぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰だれが乗じたって怖こわくはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないといけないと云うんです」

野だおとなが大人しくなったなど気が付いて、ふり向いて見ると、い

つしか艫ともの方で船頭と釣の話をしている。野だおとなが居ないんでよっ

ほど話しよくなった。

「僕の前任者が、誰だれに乗ぜられたんです」

「だれと指すと、その人の名誉に関係するから云えない。また判然と証しょうこ拠このない事だから云うとこちの落度になる。とにかく、

せっかく君が来たもんだから、ここで失敗しちや僕等ぼくらも君を呼んだ甲斐かいがない。どうか氣を付けてくれたまえ」

「氣を付けろつたつて、これより氣の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いいんでしよう」

赤シャツはホホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云った覚えはない。今日こんにちただ今に至るまでこれでいいと堅かたく信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨しょう

励れいしているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純じゆん粋すいな人を見ると、坊ぼっちゃんだの小僧こぞうだのと難癖なんくせをつけて軽蔑けいべつする。それじゃ小学校や中学校で嘘うそをつくな、正直にしろと倫理りんりの先生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じてない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホと笑つたのは、おれの単純なのを笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じゃ仕様がなない。清はこんな時に決して笑つた事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論わ悪い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事を

しなくつても、人の悪るのが分らなくつちや、やっぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落らいらくなように見えても、淡泊なように見えても、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めつたに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は霽もやでセピヤ色になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇絶きぜつですね。時間があると写生するんだが、惜おしいですね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛ふえがヒューと鳴るとき、おれの乗っていた舟は磯いその砂へぎぐりと、舳へさきをつき込んで動かな

くなくなった。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立って赤シャツに
 挨拶する。おれは船端から、やつと掛声をして磯へ飛び下
 りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈め
 ちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が気に食わない。あれは
 持前の声をわざと気取ってあんな優しいように見せてるんだろう。
 いくら気取ったって、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつ
 てマドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかし

い事を云う。うちへ帰って、あいつの申し条を考えてみると一応もつとものもうでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつかかねるが、何でも山やまあらし嵐あらしがよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそうとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪わるい教師なら、早く免めんしよく職しよくさしたらよかろう。教頭なんて文学士の癖くせに意気地いくじのないもんだ。蔭かげぐち口くちをきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極きまつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないって、親切を無にしちや筋ぢが違ちがう。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友

達が悪漢だなんて、人を馬鹿ばかにしている。大方田舎いなかだから万事東京のさかに行くんだろう。物騒ぶっそうな所だ。今に火事が氷つて、石が豆腐とうふになるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵たいていの事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りまわくどい事をしないで、じかにおれを捕つかまえて喧嘩けんかを吹き懸かけりや手数が省ける訳だ。おれが邪魔じゃまになるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談むこずくでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳でもあるまい。どこの果はてへ行つたつて、のたれ死じにはしないつもりだ。

山嵐もよつほど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に氷水を奢ったのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、氷水でも奢ってもらっちゃ、おれの顔に関わる。おれはたった一杯ぱいしか飲まなかったから一錢五厘りんしか払はらわしぢやない。しかし一錢だろうが五厘だろうが、詐欺師さぎしの恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行ったら、一錢五厘返しておこう。おれは清きよから三円借りている。その三円は五年経たつた今日までまだ返さない。返せないんじゃない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懐かいちゆう中をあてにしてはいない。おれも今に返そうなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こつちがこんな心配をすればするほど清の心

を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけふるのじゃない、清をおれの片破かたわれと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまちゃだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまっているのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に對する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちで難ありがた有いと恩に着るのは銭金で買える返礼じゃない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊たつといお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一錢五厘ふんぱつ奮ふんぱつ発させて、百万両より尊とい返礼をした氣でいる。山嵐は難ありがた有いと思つてしかるべきだ。

それに裏へ廻つて卑劣な振舞ひれつ ふるまいをするとは怪けしからん野郎やろうだ。あした行つて一錢五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやろう。

おれはここまで考えたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまつた。あくる日は思う仔細しさいがあるから、例刻より早や目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨はくぼくが一本たて豎に寝ているだけで閑静かんせいなものだ。おれは、控所ひかえじよへはいるや否や返そうと思つて、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一錢五厘、学校まで握にぎつて来た。おれは膏あぶらつ手だから、開けてみると

一錢五厘が汗あせをかいている。汗をかいてる錢を返しちや、山嵐が何とか云うだろうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑めいわくでしたろうと云つたから、迷惑めいわくじゃありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱ひじを突いて、あの盤ばん台面んだいづらをおれの鼻の側面へ持つて来たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰だれにも話しやしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そうと云う心持ちで、すでに一錢五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちや、

ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎なぞをかけておきながら、今さらその謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬しのぎを削けずつてる真中まんなかへ出て堂々とおれの肩かたを持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというもんだ。

おれは教頭に向むかつて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云ったら、赤シャツは大いに狼狽ろうばいして、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君ぼく ほったの事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動そうどうを起すつ

もりで来たんじゃないやなろうと妙に常識をはずれた質問をするから、
 当り前あたまえです、月給をもらったり、騒動を起したりしちや、学校の
 方でも困るでしょうと云った。すると赤シャツはそれじゃ昨日の
 事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなと汗をかいて依頼いらひ
 に及ぶおよから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑
 ならよしでしょうと受け合った。君大丈夫かいと赤シャツは念を
 押おした。どこまで女らしいんだか奥行おくゆきがわからない。文学士な
 んて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄つじつまの合わない、
 論理に欠けた注文をして恬然てんぜんとしている。しかもこのおれを疑
 ぐってる。憚りはばかりながら男だ。受け合った事を裏へ廻まわって反古ほごにす
 るようなさもない了りようけん見はもってるもんか。

ところへ 両隣^{りようどな}りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ歸つて行つた。赤シャツは歩^あるき方から氣取つてる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴^{くつ}の底をそつと落^{おと}す。音を立てないであるくのが自慢^{じまん}になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒^{どろぼう}の稽古^{けいこ}じやあるまいし、当り前にするがいい。やがて始業の喇叭^{らっぱ}がなつた。山嵐はどうとう出て来ない。仕方がないから、一錢五厘を机の上へ置いて教場へ出掛^{でか}けた。

授業の都合^{つごう}で一時間目は少し後^{おく}れて、控所へ歸つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話^わをしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻^{ちこく}したんだ。おれの顔を見るや否や今

日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金ばつぎんを出したまえと云った。おれは机の上にあつた一錢五厘を出して、これをやるから取つておけ。先達せんだつとおりちよう町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてゐるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目まじめでいるので、つまらない冗談じようだんをするなと錢をおれの机の上に掃はき返した。おや山嵐の癖くせにどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁いんえんがないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一錢五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思ひ出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだ

から返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云った。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣ひれつをあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤まつかになつてゐるのにふんという理窟りくつがあるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一錢五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主ていしゅが来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝けさあすこへ寄つて詳くわ

しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云ってやろう。君は乱暴であの下宿で持て余あまされてゐるんだ。いくら下宿の女房だって、下女たあ違ちがうぜ。足を出して拭ふかせるなんて、威張いばり過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困つ

てるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物かけものを一幅ぶく売りや、すぐ浮ういてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎やろうだ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云うんだろう。君出てやれ」

「当り前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云い懸りがを云うような所へ周旋しゅうせんする君からしてが不埒ふらちだ」

「おれが不埒か、君が大人おとなしくないんだか、どっちかだろう」

山嵐もおれに劣おとらぬ肝癪かんしゃく持ちだから、負け嫌ぎらいいな大きな声を出

す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思つて、みんな、おれと山嵐の方を見て、顚あざを長くしてぼんやりしている。おれは、別

に恥^はずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡^{みま}わしてやった。みんなが驚^{おど}ろいてるなかに野ただけは面白そうに笑っていた。おれの大きな眼^めが、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干^{かん}瓢^{びょう}づらを射貫^{いぬ}いた時に、野だは突^{とつ}然^{ぜん}真面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖^こわかったと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからと容^{よう}子^すが分らないが、職員が寄って、たかつて自分勝手な説をたてて、そ

れを校長が好い加減に纏めるのだろう。纏めるといふのは黒^{こくびや}白^くの決しかねる事柄^{ことがら}について云うべき言葉だ。この場合のような、誰が見たって、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰^{ひまつぶ}しだ。誰が何と解釈したって異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座^{そくざ}に校長が処分してしまえばいいに。随分^{ずいぶん}決断のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切^{にき}らない愚図^{ぐず}の異名だ。

会議室は校長室の隣^{とな}にある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張った椅子^{いす}が二十脚^{きやく}ばかり、長いテーブルの周囲^{なら}に並んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端^{はじ}に校長が坐^{すわ}つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あと

は勝手次第に席に着くんだそうだが、たいそう体操の教師だけはいつも
 席末に謙遜けんそんするという話だ。おれは様子が分らないから、博物
 の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。こ向うを見ると山嵐と野
 だが並んでる。野だの顔はどう考えても劣等だ。喧嘩はしても山
 嵐の方が遥はるかに趣おもむきがある。おやじの葬式そうしきの時に小日向こびなたの養源ようげん
 寺じの座敷ざしきにかかつてた懸物はこの顔によく似ている。坊主ぼうずに聞
 いてみたら韋駄天いだてんと云う怪物だそうだ。今日は怒おこってるから、眼
 をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇おどかさ
 れてたまるもんかと、おれも負けない気で、やつぱり眼をぐりつ
 かせて、山嵐をにらめてやった。おれの眼は恰好かっこうはよくないが、
 大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きい

から役者になるときつと似合いますと清がよく云ったくらいだ。

もう大抵お揃いそろでしようかと校長が云うと、書記の川村と云う

のが一つ二つと頭数を勘かんじよう定じようしてみる。一人足りない。一人不

足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子とうなすのうら

なり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世すくせの因縁

かしないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。

控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途とちゆう中ちゆうをあるいて

いても、うらなり先生の様子ようしが心に浮うかぶ。温泉へ行くと、うらな

り君が時々蒼あおい顔おもてをして湯壺ゆつぽのなかに膨ふくれている。挨拶あいさつをする

とへえと恐きようしゆく縮しゆくして頭を下げるから気の毒になる。学校へ出て

うらなり君ほど大人しい人は居ない。めったに笑った事もないが、

余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、やっぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐すわろうかと、ひそかに目め標じろしにして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしょうと、自分の前にある紫の袱紗むらさきふくさづ包つみをほどいて、蒟蒻版こんにやくばんのような者を読んでいる。赤シャツは琥珀こはくのパイプを絹ハンケチで磨みがき始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で

何だか私ささや語り合っている。手持無沙汰なのは鉛筆えんぴつの尻しりに着いている、護謨ゴムの頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖こわい眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨にらめ返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありました、遅刻いた致しましたと慇懃いんぎんに狸たぬきに挨拶あいさつをした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒔蒔版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締とりしまりの件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもったいぶって、教育いきりよの生生霊うという見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒

に過失のあるのは、みんな自分の寡徳かとくの致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧ざんきの念に堪たえんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向って謝罪しなければならん。しかしひとたび起った以上は仕方がない、どうか処分をせんければならん、事實はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹藏のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎とがだとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職めんしよくになったら、

よさそうなもんだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つてゐる。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなければ、おれでもない、生徒だけに極つてゐる。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治ればそれでたくさんだ。人の尻を自分で背負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当じゃない。彼はこんな条理に適わない議論を吐いて、得意氣に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものがない。博物の教師は第一教場の屋根に烏がとまつてゐるのを眺めている。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりしてゐる。山嵐はまだおれの顔をにらめて

いる。會議と云うものが、こんな馬鹿ばか氣けたものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれったくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞しまのある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云っている。あの手巾はんけちはきつとマドンナから巻き上げたに相違そちがいない。男は白い麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届ふゆきとどきであり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚はずるのであります。でこ

う云う事は、何か陷かんけつ欠があると共に起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責

任はかえって学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで嚴重な制裁を加えるのは、かえって未来のためによくないかとも思われます。かつ少年血氣のものであるから活氣があふれて、善惡の考えはなく、半ば無意識にこんな惡戲いたずらをやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙ようかいする限りではないが、どうかその辺をご斟し酌しやくになつて、なるべく寛大なお取計とりはからいをお願いしたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪るいんだと公言している。氣狂きちがいが人の頭を撲りなぐ付けるのは、なぐられた人がわるいから、氣

狂がなぐるんだそうだ。難^{ありがた}有^たい仕合せだ。活気にみちて困るなら運動場へ出て相撲^{すもう}でも取るがいい、半ば無意識に床の中へバツタを入れられてたまるものか。この様子じゃ寝頸^{ねくび}をかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだろう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、云うなら人を驚ろすかように滔^{とうとう}々と述べたてなくっちゃつまらない、おれの癖として、腹が立ったときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞^{つま}つてしまう。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋^{しゃべ}舌^つつて揚^あげ^{あし}し、足を取られちゃ面白くない。ちよつと腹案を作つてみよう、

胸のなかで文章を作つてゐる。すると前に居た野だが突然起立した

には驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「実に今回のバツタ事件及び咄とつかん喊事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮ふるって自ら省りみて、全校の風紀を振しんしゆく肅しなしなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになったお説は、実に肯綮こうけいに中あたつた剴切がいせつなお考えで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大かんだいのご処分を仰あおぎたいと思います」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列ちんれつするぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起^たち上がってしまった。「私は徹頭徹尾反対です……」と云ったがあとが急に出て来ない。

「……そんな頓^{とん}珍^{ちん}漢^{かん}な、処分は大^{だい}嫌^{いき}いです」とつけたら、職員が一同笑い出した。「一体生徒が全然悪^{わる}いんです。どうしても詫^{あや}まらせなくっちゃ、癖になります。退校さしても構いません。

……何だ失敬な、新しく来た教師だと思って……」と云って着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり嚴重な罰などをするとかえって反動を起していけないでしょう。やっぱり教頭のおつしやる通り、寛な方に賛成します」と弱い事を云った。左隣の漢学は穩^{おん}便^{びん}説^{せつ}に賛成と云った。歴史も

教頭と同説だと云った。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。

こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ歸つて荷作りをする覚悟でいた。どうせ、こんな手合を弁口で屈伏させる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。

また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄すましていた。すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がつた。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓ガラスを振ふるわせるような

声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。
 というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新
 来の教師某氏を軽侮してこれを翻弄しようとした所為とより外
 には認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物いか
 んにお求めになるようでありますが失礼ながらそれは失言かと思
 います。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒
 に接せられてから二十日に満たぬ頃であります。この短かい二十
 日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであ
 ります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら
 生徒の行為に斟酌を加える理由もありましょうが、何らの源
 因もないのに新来の先生を愚弄するような軽薄な生徒を寛宥して

は学校の威信いしんに関わる事と思います。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚こうしような、正直な、武士的な元気を鼓吹こすいすると同時に、野卑やひな、軽躁けいそうな、暴慢ぼうまんな悪風を掃蕩そうとうするに
あると思います。もし反動が恐おそろしいの、騒動が大きくなるのと姑こ
息そくな事を云った日にはこの弊風へいふうはいつ矯きよう正せい出来るか知れま
せん。かかる弊風とぜつを杜絶とぜつするためにこそ吾々はこの学校に職を奉
じているので、これを見逃みのがすくらいなら始めから教師にならん
方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を嚴罰げんばつに処
する上に、当該とうがい教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむ
るのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰こしを卸おろした。
一同はだまって何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭ふき始

めた。おれは何だか非常に嬉^{うれ}しかった。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難^{ありがた}有いと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面^{かお}をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちよつと失念して言い落^{おと}しましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎^{とが}める者のないのを幸^{さいわい}に、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくなど云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長

からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあばいている。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまったんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪うかつた。攻撃されても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等だ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、

よく考えた上で処分しましょうと云った。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になった上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだった。がなまじい、おれのいう通りになったのでとうとう大変な事になつてしまった。それはあとから話すが、校長はこの時會議の引き続きだと号してこんな事を云った。生徒の風儀は、教師の感化で正していかななくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などに出入しない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしい——たとえば蕎麦屋だの、団子屋だの——と云いかけたらまた一同が笑った。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが

山嵐は取り合わなかった。いい気味だ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくなつちや、おれみたような食い心棒しんぼうにや到底出来とうていつ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇やとうがいい。だんまりで辞令を下げたおいて、蕎麦を食うな、団子を食うなと罪なお布令ふれを出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的の快樂ばかり求めるべきものでない。その方に耽ふけるとつい品性にわるい影えいきよう響を及ぼすようになる。しかし

人間だから、何か娯樂ごらくがないと、田舎いなかへ来て狭い土地では到底暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高こう尚しょうな精神的娯樂を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いていると勝手な熱を吹く。沖おきへ行つて肥料こやしを釣つたり、ゴルキが露西亞ロシヤの文学者だったり、馴染なじみの芸者が松まつの木の下に立ったり、古池かわずへ蛙が飛び込んだりするものが精神的娯樂なら、天麩羅を食つて団子のを呑み込むのも精神的娯樂だ。そんな下さらない娯樂を授けるより赤シャツの洗濯せんたくでもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢あうのも精神的娯樂ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互たがいに眼と

眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

七

おれは即夜^{そくや}下宿を引き払^{はら}った。宿へ歸つて荷物をまとめていると、女^{にようぼう}房^{ふつこう}が何か不都合でもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云^いつておくれたら改めますと云う。どうも驚^{おど}ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃^{そろ}つてゐるんだろ^{わか}う。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分りやしない。

まるで氣狂だ。きちがい。こんな者を相手に喧嘩けんかをしたって江戸えどつ子の名折れだから、車屋をつれて来てさっさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾ついて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて来た。面倒めんどうだから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてるうちには下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意に叶かなったわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静かんせいで住みよさそうな所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町かじやちょうへ出てしまった。ここは士族屋敷やしきで下宿屋などのある町ではないから、もっと賑にぎやかな方へ引き返そうかと

も思ったが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでいる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控^{ひか}えているくらいだから、この辺の事情には通じているに相違^{そうい}ない。あの人を尋^{たず}ねて聞いたたら、よさそうな下宿を教^{おし}えてくれるかも知れない。幸^{さい}一度^{いっ}挨拶^{あいさつ}に来て勝手は知^しつてゐるから、捜^さがしてあるく面倒はない。ここだろうと、いい加減に見当^{みあた}をつけて、ご免^{めん}ご免^{めん}と二返ばかり云うと、奥^{おく}から五十ぐらいな年寄^{としより}が古風^{こふう}な紙燭^{しそく}をつけて、出て来た。おれは若い女も嫌^{きら}いではないが、年寄^{としより}を見ると何だかなつかしい心持^{こも}ちがする。大方^{きよ}清^{きよ}がすきだから、その魂^{たましい}が方々^{ばあ}のお婆^{ばあ}さん^あに乗り移^{うつ}るんだらう。これは大方^{きよ}うらなり君のおつ母^かさんだらう。切り下げの品格のある婦人だが、

よくうらなり君に似ている。まあお上がりと云うところを、ちよ
つとお目にかかりたいからと、主人を玄関げんかんまで呼び出して実は
これこれだが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うら
なり先生それはさぞお困りでございましょう、としばらく考えて
いたが、この裏町に萩野はぎのと云つて老人夫婦むすめで暮らしているも
のがある、いつぞや座敷ざしきを明けておいても無駄むだだから、たしかな
人があるなら貸してもいいから周しゅうせん旋せんしてくれと頼たのんだ事があ
る。今でも貸すかどうか分らんが、まあいっしょに行つて聞いて
みましょうと、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚おどろいたのは、おれがい
か銀の座敷を引き払うと、翌あくるひ日から入れ違ちがいに野だが平気な顔

をして、おれの居た部屋をせんりよう占領した事だ。さすがのおれこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互たがいに乗せつこをしていゝのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並せけんなみにしな
くちや、遣やりきれない訳になる。巾着切きんちやくきりの上前をはねなけれ

ば三度のご膳ぜんが戴いたけないと、事が極きまればこうして、生きてるの
も考え物だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊くつち

や先祖へ濟まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへは
いつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を
資本もとでにして牛乳屋でも始めればよかつた。そうすれば清もおれの
傍そばを離はなれずに濟むし、おれも遠くから婆さんの事を心配くしらずに暮

される。いっしょに居るうちは、そうでもなかったが、こうして田舎へ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな氣立きだてのいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪かぜを引いていたが今頃いまごろはどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだらう。それにしても、もう返事がきそうなものだが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

氣になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞たずくたんびに何にも参りませんと氣の毒そんな顔をする。ここの夫婦はいか銀とは違って、もとが士族だけにそうほう双方共上品だ。爺じいさんが夜よるになると、変な声を出して謡うたいをう

たうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようとお暗むやみに出て来ないから大きに樂だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話をする。どうして奥さんをお連れなさつて、いつしよにお出いでなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想かわいそうにこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがありなさるのは当り前ぞなもしと冒頭ぼうとうを置いて、どこの誰だれさんは二十でお嫁よめをお貰もらいたの、どこの何とかさんは二十二で子供を二人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁はんぱくを試みたには恐れ入おそつた。それじや僕ぼくも二十四でお嫁をお貰いるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似まねて頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと

聞いた。

「本当の本当のほんまのつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がないんだ」

「そうじやろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじゃけれ
この挨拶あいさつには痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおりなさるに極きまつとらい。私はち
やんと、もう、睨ねらんどるぞなもし」

「へえ、活眼かつがんだね。どうして、睨ねらんどるんですか」

「どうしてて。東京から便りはないか、便りはないかて、毎
日便りを待ち焦こがれておいでるじやないかなもし」

「こいつあ驚おどろいた。大変な活眼だ」

「中あたりましたろうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子は、おなご昔と違むかしちがうて油断が出来んけれ、お氣をお付けたがええぞなもし」

「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえていますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじやけれど……」

「それで、やっと安心した。それじや何を氣を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじやが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等らにも大分居おります。先生、あの遠山のお嬢じようさんをご存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。ここらであなた一番の別嬪^{べっぴん}さんじやがなもし。あまり別嬪さんじゃけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言うといでるぞなもし。まだお聞きのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思った」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人^{とうじん}の言葉で、別嬪さんの事じやろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生がお付けたのじゃがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なものろくは居ません

からね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじゃなもし。鬼神のお松じやの、姫妃のお百じや

のてて怖い女が居りましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここ

へ世話をしておくれた古賀先生なもし——あの方の所へお嫁に行

く約束が出来ていたのじゃがなもし——」

「へえ、不思議なもんですね。あのうらなり君が、そんな艶福えんぷくのある男とは思わなかった。人は見懸みかけによらない者だな。ちつと気を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持ってお出いでるし、万事都合つごうがよかったのじゃが——それからというものは、どういうものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好過よすぎるけれ、お欺だまされたんぞなもし。それや、これやでお興こしいれ入も延びているところへ、あの教頭さんがお出いでて、是非お嫁にほしいとお云いるのじゃがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴やつだ。どうもあのシャツはただ

のシャツじゃないと思つてた。それから？」

「人を頼んで懸合^{かけあ}うておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじやがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓^{てづる}を求めて遠山さんの方へ出入^{でいり}をおしるようになって、とうとうあなた、お嬢さんを手馴^{てなづ}付けておしまいたのじやがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじやが、お嬢さんもお嬢さんじやて、みんなが悪^{わる}く云いますのよ。いったん古賀さんへ嫁に行くてて承知をしときながら、今さら学士さんがお出^{いで}たけれ、その方に替^かえよてて、それじや今日^{こんにち}様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、い

つまで行つたつて済みつこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じやてて、お友達の堀田さんほったが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるものを横取りするつもりはない。破約になれば貰うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじや、遠山家と交際するには別段古賀さんに済まん事もなかうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りもどたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折おり合あいがわるいという評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知つてますね。どうして、そんな詳くわしい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭せまいけれ何でも分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子^{ようす}じゃおれの天麩羅^{てんぷら}や団子^{だんご}の事も知ってるかも知れない。厄介^{やっかい}な所だ。しかしお蔭^{かげ}様^{さま}でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になった。ただ困るのはどっちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どっちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐たあ、どっちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シヤツさんは学士さんじゃけれ、働きはある方^{かた}ぞな、もし。それか

ら優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどっちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いえらのじやろうがなもし」

これじや聞いたつて仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やっと参りました。と一本の手紙を持って来てゆつくりご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋ふせんが二三枚まいついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀まわの方へ廻まわして、いか銀から、萩野はぎのへ廻まわつて来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗とまり留ゆうしている。宿屋だけに手紙まで泊とめるつ

もりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思つたが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ていたものだから、つい遅くなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥おいに代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下したがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、これでも一生懸命いっしょうけんめいにかいたのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭ぼうとうで四尺ばかり何やらかやら認しためてある。な

るほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵平仮名だ
 から、どこで切れて、どこで始まるのだから句読をつけるのによつ
 ぽど骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、
 分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わる
 のだが、この時ばかりは真面目になつて、始から終まで読み通し
 た。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつか
 がないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗
 くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう椽鼻へ
 出て腰をかけながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉
 の葉を動かして、素肌すはだに吹きつけた帰りに、読みかけた手紙
 を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れ

がさらりさらりと鳴つて、手を放すと、向うむこの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構つていられない。坊っちゃんは竹を割つたような気性だが、ただ肝かんしやく癪がくが強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗むやみに渾名あだななんか、つけるのは人に恨うらまれるものになるから、やたらに使つちやいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。——田舎者は人がわるいそうだから、気をつけてひどい目に遭あわないようにしろ。——氣候だつて東京より不順に極つてゐるから、寝冷ねびえをして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、

田舎へ行つて頼たよりになるはお金ばかりだから、なるべく儉約けんやくして、万一の時に差支さしつかえないようにしなくっちゃいけない。——お小遣こづかいがなくて困るかも知れないから、為替かわせで十円あげる。——先せんだつて坊っちゃんからもらった五十円を、坊っちゃんが、東京へ歸つて、うちを持つ時の足しにと思つて、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。

おれが椽鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込こんでいると、しきりの襖ふすまをあけて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出いでるのかなもし。えっぽど長いお手紙じやなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かして

は見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳ぜんについた。見

ると今夜も薩摩芋さつまいもの煮につけだ。このうちは、いか銀よりも鄭て

寧いねいで、親切で、しかも上品だが、惜おしい事に食い物がまずい。

昨日も芋、一昨日おとといも芋で今夜も芋だ。おれは芋は好きだと明言

したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされては命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうち

に、芋のうらなり先生になっちまう。清ならこんな時に、おれの

好きな鮪まぐろのさし身まか、蒲鉾かまぼこのつけ焼を食わせるんだが、貧乏びんぼう

士族のけちん坊ぼうと来ちや仕方がない。どう考えても清といつしよ

でなくつちあ駄目だめだ。もしあの学校に長くでも居る模様なら、東

京から召よび寄よせてやろう。天麩羅蕎麦そばを食つちやならない、団子

を食っちゃならない、それで下宿に居て芋ばかり食って黄色くな
 っているなんて、教育者はつらいものだ。 禅ぜんしゅう 宗坊主だつて、
 これよりは口に榮耀えようをさせているだろう。――おれは一皿の芋を
 平げて、机の抽斗ひきだしから生卵を二つ出して、茶碗ちやわんの縁ふちでたたき
 割つて、ようやく凌しのいだ。生卵でも營養をとらなくつちあ一週
 二十一時間の授業が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなった。しかし毎日行き
 つけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗つ
 て出懸でかけようと、例の赤手拭あかてぬぐいをぶら下げて停車場ていしやばまで来ると
 二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチ
 へ腰を懸けて、敷島しきしまを吹かしていると、偶然ぐうぜんにもうらなり君

がやって来た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君がな
おさら氣の毒になった。平常ふだんから天地の間に居い候そうろうをしている
ように、小さく構かえているのがいかにも憐あわれに見えたが、今夜は
憐れどころの騒さわぎではない。出来るならば月給を倍にして、遠山
のお嬢さんと明日あしたから結けつ婚こんさして、一ヶ月ばかり東京へでも遊
びにやってやりたい氣がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、
こつちへお懸けなさいと威勢いせいよく席ゆずを譲ゆずると、うらなり君は恐おそれ
入いった体裁ていざいで、いえ構かうておくれなさるな、と遠慮えんりよだか何なだか
やっぱり立たつてゐる。少し待たなくっちゃ出でません、草臥くたびれますか
らお懸けなさいとまた勸めてみた。実はどうかして、そばへ懸け
てもらいたかつたくらいに氣の毒でたまらない。それではお邪魔じやま

を致^{いた}しましうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中
には野だみたように生意気な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴
もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや^{につぽん}日本が困るだろうと
云うような面を肩^{かた}の上へ載^のせてる奴もいる。そうかと思うと、赤
シャツのようにコスメチックと色男の間屋をもつて自ら任じてい
るのもある。教育が生きてフロツクコートを着ればおれになるん
だと云わぬばかりの狸^{たぬき}もいる。皆^{みなみな}々それ相応に威張^{なび}つてるんだ
が、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取
られた人形のように大人^{おとな}しくしているのは見た事がない。顔はふ
くれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡^{なび}くなんて、
マドンナもよつぽど気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダー

ス寄ったつて、これほど立派な旦那様だんなさまが出来るもんか。

「あなたはどつか悪いんじやありませんか。大分たいぎそうに見えますが……」 「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分ご丈夫じょうぶのようですね」

「ええ瘠やせても病氣はしません。病氣なんてもものあ大嫌いですが
ら」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑った。

ところへ入口で若々しい女の笑声きこが聞えたから、何心なく振り

返つてみるとえらい奴が来た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並ならんで切符きっぷを売る窓の前に立つ

ている。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云えないが全く美人に相違ない。何だか水^{すいしょう}晶^{たま}の珠^{たま}を香水^{こうすい}で暖^{あつ}ためて、掌^{てのひら}へ握^{にぎ}つてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなど思う途端^{とたん}に、うらなり君の事は全^{すつかり}然^{ぜん}忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突^{とつぜん}然^{ぜん}おれの隣^{となり}から、立ち上がつて、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思った。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるのか分らない。

停車場の時計を見るともう五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなど、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思っていると、

また一人あわてて場内へ馳^かけ込んで来たものがある。見れば赤シヤツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮^{ちり}緬^{めん}の帯をだらしく巻き付けて、例の通り金鎖^{きんぐさ}りをぶらつかしている。あの金鎖^{きんぐさ}りはにせもの贋物である。赤シヤツは誰^{だれ}も知るまいと思つて、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてる。赤シヤツは馳^かけ込んだなり、何かきよろきよろしていたが、切符売下所^{うりさげじよ}の前に話している三人へ慇懃^{いんぎん}にお辞儀^{じぎ}をして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足^{ねこあし}にあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで来たたら、まだ三四分ある。あの時計はたしかかしらんと、自分の金側^{きんがわ}を出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍^{そば}

へ腰を卸おろした。女の方はちつとも見返らないで杖つえの上に願あこをのせて、正面ばかり眺ながめている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違いない。

やがて、ピューと汽笛きてきが鳴って、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾われ勝がちに乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗ったって威張れるところではない、住田すみたまで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか二銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮ふんぱつ発して白切符にぎを握にぎってるんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たった二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵たいていは下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君

は活版で押おしたように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇ちゆうちよの体ていであつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまった。おれはこの時何となる気の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなからう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣ゆかたのなりで湯壺ゆつぽへ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まると、咽喉のどが塞ふさがつて饒舌しゃべれない男だが、平常ふだんは随分ずいぶん弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぽくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰なぐさめてやる

のは、江戸えどっ子の義務だと思ってる。ところがあいにくうらなり君の方では、うまい具合にこっちの調子に乗ってくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえが大分め面倒めんどうらしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こっちからご免めんこうむ蒙もった。

湯の中では赤シャツに逢わなかった。もつとも風呂ふろの数はたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まっていけない。別段不思議にも思わなかった。風呂を出てみるといい月だ。町内の両側やなぎうわに柳が植うつて、柳の枝えだが丸まるい影を往来の中へ落おとしている。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が

妓楼ぎろうである。山門のなかに遊廓ゆうかくがあるなんて、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾のれんをかけた、小さな格子窓こうしまどの平屋はおれが団子を食べ、しくじつた所だ。丸提灯まるぢようちんに汁粉しるこ、お雑煮ぞうにとかいたのがぶらさがって、提灯の火が、軒端のきばに近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなど思ったが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁いいなずけが他人に心に移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚かおろ、三日ぐらい断食だんじきしても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、

どうしたって、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが――
 うつくしい人が不人情で、冬瓜とうがんの水膨れみずぶくのような古賀さん
 が善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊たんぱくだと思つた山嵐
 は生徒を煽動せんどうしたと云うし。生徒を煽動したのかと思うと、生
 徒の処分を校長に逼せまるし。厭味いやみで練りかためたような赤シャツが
 存外親切で、おれに余所よそながら注意をしてくれるかと思うと、マ
 ドンナを胡魔化ごまかしたり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破
 談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖なんくせ
 をつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ替かわつた
 り――どう考えてもあてにならない。こんな事を清にかいてやつ
 たら定めて驚く事だろう。箱根はこねの向うだから化物ばけものが寄り合つて

るんだと云うかも知れない。

おれは、性しょうらい来構わない性分だから、どんな事でも苦にしな

いで今日まで凌いで来たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物ぶつ騒そうに思い出した。別段

際だった大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取ったような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。な

どとそれからそれへ考えて、いつか石橋を渡わたつて野芹川のぜりがわの堤どてへ

出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちよろちよろ

した流れで、土手に沿うて十二丁ほど下ると相生村あいおいむらへ出る。村

には観音様かんのんさまがある。

温泉ゆの町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいてい

る。太鼓^{たいこ}が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早
いから、神経質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上を
あるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影^{ひとかげ}が見え出
した。月に透^すかしてみると影は二つある。温泉^ゆへ来て村へ帰る若
い衆^{しゅ}かも知れない。それにしては唄^{うた}もうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影
法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞き
つけて、十間^{きより}ぐらいの距離に逼つた時、男がたちまち振り向いた。
月は後^{うしろ}からさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなど
思つた。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあ
るから、急に全速力で追つ懸^かけた。先方は何の気もつかずに最初

の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵くびすをぐりりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈がりの頭から顚あたの辺りまで、会釈えしゃくもなく照てらす。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促うながすが早いか、温泉ゆの町の方へ引き返した。

赤シャツは図太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損そくなつたのかしら。ところが狭くて困つてるのは、おればかりではなかつた。

八

赤シャツに勧められて釣^{つり}に行つた帰りから、山^{やま}嵐^{あらし}を疑^うぐり出した。無い事を種に下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒^{ふらち}な奴^{やつ}だと思つた。ところが会議の席では案^{そう}に相違^いして滔^{とう}々^{とう}と生徒^{げんぱつろん}厳罰論^{げんぱつろん}を述べたから、おや変^へだなと首^ひを振^ふつた。萩野^{はぎの}の婆^{ばあ}さんから、山嵐^{やまあらし}が、うらなり君のために赤シャツと談判^{だんぱん}をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍^うつた。この様子ではわる者は山嵐^{やまあらし}じゃあるまい、赤シャツの方が曲^まつてゐるんで、好^い加減^{かげん}な邪^{じゃ}推^いを突^ましやかに、しかも遠^と廻^{おも}しに、おれの頭の中へ浸^しみ込^こましたのではあるまいかと迷^{まよ}つてゐる矢先^のへ、野芹川^{のぜりがわ}の土手で、マ

ドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シヤツは曲^く者^{せもの}だと極^きめてしまった。曲者だか何だかよくは分^{わか}らないが、ともかくも善^いい男じやない。表と裏とは違^{ちが}つた男だ。人間は竹のように真直^{まつすぐ}でなくつちや頼^{たの}もしくない。真直なものは喧嘩^{けんか}をしても心持ちがいい。赤シヤツのようなやさしいのと、親切なのと、高^{こう}尚^{しょう}なのと、琥珀^{こはく}のパイプとを自慢^{じまん}そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めつたに喧嘩も出来ないと思つた。喧嘩をしても、回向院^{えこういん}の相撲^{すもう}のような心持ちのいい喧嘩は出来ないと思つた。そうなると一錢五厘の出入^{でいり}で控^{ひかえ}所^{じよ}全体を驚^{おど}ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金^かなつばまなこ

壺眼^こをぐりつかせて、おれを睨^{にら}めた時は憎^{にく}い奴だと思つたが、

あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声ねこなでごえよりは
 ました。実はあの会議が済んだあとで、よつぽど仲直りをしよう
 かと思つて、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事やろうもしない
 で、まだ眼めを剥むくつてみせたから、こつちも腹が立つてそのままに
 しておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘
 はいまだに机の上に乗っている。ほこりだらけになつて乗つてい
 る。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。こ
 の一銭五厘が二人の間の牆壁しょうへきになつて、おれは話そうと思つ
 ても話せない、山嵐は頑がんとして黙だまつてゐる。おれと山嵐には一銭五
 厘たが祟たつた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつ

た。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易^かえて、赤シャツとおれは依然^{いぜん}として在来の關係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢^あつた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍^{そば}へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしよに露西亞^{ロシア}文学を釣^つりに行こうじやないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎^{にく}らしかつたから、昨夜^{ゆうべ}は二返逢いましたねと云^いつたら、ええ停車^{ていしや}場で——君はいつでもあの時分出掛^{でか}けるのですか、遅いじやないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸^かりましたねと喰^くらわしてやったら、いい僕^{ぼく}はあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠^{かく}さないでもよからう、現に逢つ

てるんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいいよ赤シヤツを信用しなくなった。信用しない赤シヤツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしない。世の中は随分妙なものだ。
ある日の事赤シヤツがちよつと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛けて行つた。赤シヤツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾銭だそうだ。田舎へ来て九円五拾銭払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シヤツ

の弟が取次^{とりつぎ}に出て来た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわるい子だ。その癖^{くせ}渡り^{わた}ものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪^{わる}い。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭^{くさ}い烟草^{たばこ}をふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績^{せいせき}がよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでいたので——どうか学校でも信^{しん}頼^{らい}しているのだから、そのつもりで勉強していただききたい」

「へえ、そうですか、勉強つて今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充^{じゅう}分^{ぶん}です。ただ先だつてお話しした事です、ね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ劍呑だという事ですか」

「そう露骨ろこつに云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——

精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出しゅっせい精せいして下されば、学校の方でも、ちゃんと見ているんだから、もう少しして都合つごうさえつけば、待遇たいぐうの事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸ほうきゆう給きゅうですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上があれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通ゆうずうが出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校

長に話してみようと思うんですがね」

「どうも難有^{ありがと}う。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支^{つか}えないでしょう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だってここの人じゃありませんか」

「ここの地^じの人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行^ゆくんです」

「日向^{ひゆうが}の延岡^{のべおか}で——土地が土地だから一級俸上^{あが}つて行く事になりました」

「誰^{だれ}か代りが来るんですか」

「代りも大抵たいてい極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもっと働いて頂いただかなくつてはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟かくごをしてやつてもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もっと働くんですか、妙だな」

「ちよつと聞くと妙だが、——判然とは今言にくいが——まあ

つまり、君にもっと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさんなかなか辞職する気遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職は学

めんしよく

校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思って、俳句はや

りません、さようならと、そこそこに帰つて来た。発句は芭蕉（かみいどこ）か髪結床の親方のやるもんだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶（つるべ）をとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通（かよ）つてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大變な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がつて、一日馬車（いちんち）へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車（いちんち）へ乗らなくつては着

けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と
人とが半々に住んでるような気がする。いかに聖人のうらなり君
だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何という物
数奇だ。^{のずき}

ところへあいかわらず婆さん^{ばあ}が夕食^{ゆうめし}を運んで出る。今日もま
た芋^{いも}ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐^{とうふ}ぞなもと云つ
た。どっちにしたつて似たものだ。

「お婆さん古賀さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお氣の毒じゃな、もし」

「お氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」

「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしって、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじゃないませんか」

「そりやあなた、大違いの勘五郎かんごろうぞなもし」

「勘五郎かね。だって今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺ほらえもん右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古賀さんのお往いきともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんです」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したがなもし」
「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮^{くら}し向^{むき}が豊かになうてお困りじゃけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじゃけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかてて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰^{さた}があるぞ、今月から月かと首を長くして待っておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行ってみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お

望み通りでよかろうと思うて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。――」

「じや相談じやない、命令じやありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居おりたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ているけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿ばかにしてら、面白おもしろくもない。じや古賀さんは行く

気はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がったて、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木とうへんぼくはまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいさあ、——全く赤シャツの作略さりやくだね。よくない仕打しうちだ。まるで欺撃だましうちですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合ふつごうな事があるものか。上げてやるつたつて、誰が上がってやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断ことわろうと思うんです」

「何で、お断ことわりるのぞなもし」

「何でもお断ことわりだ。お婆さん、あの赤シャツは馬鹿ですぜ。卑ひ怯きようでさあ」

「卑怯おとなでもあんた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いてお

く方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじゃが、年をとってから考えると、も少しの我慢^{がまん}じゃあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損をしたと悔む^{くや}のが当り前じゃけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやろとお言いたら、難^{ありがと}有うと受けておおきなさいや」

「年^{としより}寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がろうと下がろうとおれの月給だ」

婆さんはだまって引き込んだ。爺^{じい}さんは呑気^{のんき}な声を出して謡^{うたい}をうたつてゐる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽^あきずに唸^{うな}る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒^{さわ}ぎじゃない。

月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかったが、入らない金を余しておくのももつたないと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う了見りようけんだろう。太宰権帥だざいごんのそつでさえ博多近辺はかたで落ちついたものだ。河合又五郎かあいまたごろうだつて相良でとまつてるじゃないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ氣が済まない。

小倉こくらの袴はかまをつけてまた出掛けた。大きな玄関げんかんへ突つつ立たつて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て来た。おれの顔を見てまた来たかという眼付めつきをした。用があれば二度だつて三度だつて来る。

よる夜なかだつて叩き起さないとは限らない。教頭の所へご機嫌伺いにくるようなおれと見損つてるか。これでも月給が入らないから返しに来んだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、畳付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう万歳ですよと云う声が聞える。お客とは野だだなと気がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄を穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持って玄関まで出て来て、まあ上がりたまえ、外の人じゃない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤

シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯いっぱい飲んで見える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話でしたが、少し考えが変ったから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺ながめたが、とつさの場合返事をしかねて茫然ぼうぜんとしている。増給を断わる奴が世の中にたった一人飛び出して来たのを不審ふしんに思ったのか、断わるにしても、今帰ったばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだ、と、呆あきれ返ったのか、または双方そうほう合併がつぱいしたのか、妙な口をして突っ立ったままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話

でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そうじゃないんです、ここに居たいんです。元の月給でもいいから、郷里に居たいのです」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじゃないかもしれません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母^かさんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云ったのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違ふでしょう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支さしつかえないでしようか」

おれはちよつと困つた。文学士なんてものはやつぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押おし寄せてくる。おれはよく親父おやじから貴様はそそつかしくて駄目だめだ駄目だと云われたが、なるほど少々そそつかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して来たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情くわは聞いてみなかつたのだ。だからこう文学士流に斬きり付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心の中で申し渡ししてしまった。下宿の婆さんもけちん坊の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙ります」

「それはますます可笑しい。今君がわざわざお出になつたのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否めるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりますよ」

「そんなに否^{いや}なら強いてとまでは云いませんが、そう二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹^{ひょうへん}変しちや、将来君の信用にかかわる」

「かかわつても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲^{ゆず}つて、下宿の主人が……」

「主人じゃない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削^{けず}つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剰^{じょうよ}余を君に廻^まわす

と云うのだから、君は誰にも氣の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも榮進される。新任者は最初からの約やくそ束くで安くくる。それで君が上がりければ、これほど都合つごうのいい事はないと思うですがね。いやなら否いやでもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないのだから、いつもなら、相手がこういう巧こうみよう妙めうな弁舌べんぜつを揮ふるえば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違まちがつてたと恐れ入おそって引きさがるのだけでも、今夜はそうは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中とちゆうで親切な女みたような男だと思ひ返した事はあるが、それが親切でも何でもなさそうなので、反動の結果今じゃよっぱ

ど厭^{いや}になつてゐる。だから先がどれほどうまく論理的に弁論^{たぐまじ}を逞くしようとも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だつて、腹の中まで惚^ほれさせる訳には行かない。金や威^{いりよく}力や理屈^{りくつ}で人間の心が買える者なら、高利貸でも巡^{じゅんさ}査でも大学教授でも一番人に好かれなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同じ事です。さようなら」

と云いすてて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、やまあ山嵐らしとつぜんが突然、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼たのんだから、真面目まじめに受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪わるい奴やつで、よく偽筆ぎひつへ贋落款にせらつかんなどを押おして売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目でたらめに違ちがいがない。君に懸物かけものや骨董こつどうを売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わない

で儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化^{ごまか}したのだ。僕はあの人物を知らなかったので君に大変失敬した勘^{かんべ}弁^んしたまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一錢五厘^{りん}をとつて、おれの蝦蟇^{がまぐち}口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込^こめるのかと不審^{ふしん}そうに聞くから、うんおれは君に奢^{おご}られるのが、いやだったから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やっぱり奢^{おご}ってもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思つてたが、何だか妙^{みょう}だからそのままにしておいた。近来は学

校へ来て一錢五厘を見るのが苦になるくらいいやだったと云った
ら、君はよつぽど負け惜^おしみの強い男だと云うから、君はよつぽ
ど剛情張^{ごうじよう}りだと答えてやった。それから二人の間にこんな問
答^{おこ}が起った。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸^{えど}っ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思った」

「きみはどこだ」

「僕は会津^{あいづ}だ」

「会津っ婆か、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜^{はま}まで見送りに行く
こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」
「勝手に飲むがいい。おれは肴^{さかな}を食つたら、すぐ帰る。酒なんか
飲む奴は馬鹿^{ばか}だ」

「君はすぐ喧嘩^{けんか}を吹き懸^かける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳^{けいちよう}
な風を、よく、あらわしてる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちよつとおれのうちへお寄り、
話^{はな}しがあるから」

山嵐^{やぐそく}は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれはこの間から、う

らなり君の顔を見る度に気の毒でたまらなかったが、いよいよ送別の今日となったら、何だか憐れつぽくって、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な気がした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じゃ、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝を挫いでやろうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭ぼうとうとしてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく知っている。おれが野芹のぜりが川の土手の話をして、あれは馬鹿野郎ばかやろうだと云ったら、山嵐は君はだれを捕まえても馬鹿呼わりよばわりをする。今日学校で自分の事を馬

鹿と云ったじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じゃない。自分は赤シャツの同類じゃないと主張した。それじゃ赤シャツは臍^{ふぬ}拔^はけの呆^{ほう}助^{すけ}だと云ったら、そうかもしれないと山嵐は大きい賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙^{はる}かに字を知っていない。会津っぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云った話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじゃ僕を免^{めん}職^{しよく}する考えだなど云った。免職するつもりだって、君は免職になる気かと聞いたら、誰^{だれ}がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいっしょに免職させてやると大いに威張^{いば}った。どうしてい

つしよに免職させる気かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わつたと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつているなら、なぜ留任の運動をしてやらなかったと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、既にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかったと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席に許諾したものだから、あとから

お母^{つか}さんが泣きついてても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違いない。あいつは大人^{おとな}しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃^{にげ}道を^{みち}を拵^{こしら}えて待つてゐるんだから、よつぽど奸^{かん}物^{ぶつ}だ。あんな奴にかかつては鉄^{てつ}拳^{けん}制^{せい}裁^{さい}でなくつちや利かないと、瘤^{こぶ}だらけの腕^{うで}をまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強^{じゆう}そうだな柔^{じゆう}術^{じゆつ}でもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちよつと攫^{つか}んでみろと云うから、指の先で揉^もんでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸のばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐると皮のなかで廻かいてん転する。すこぶる愉快ゆかいだ。山嵐の証明する所によると、かんじん縋よりを二本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぷつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云ったら、出来るものか、出来るならやってみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野なぐだを撲なぐつてやらないかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだな

と考えていたが、今夜はまあようと云った。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくつちや、こつちの落度になるからと、分別のありそうな事を附加つけたした。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じゃ演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のぺらぺらになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜りゆういん飲いんが起つて咽喉のどの所へ、大きな丸たまが上がつて来て言葉が出ないから、君に譲ゆずるからと云つたら、妙な病気だな、じゃ君は人中じや口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が来たから、山嵐と一所に会場へ行く。

会場は花^{かしんてい}晨亭といつて、当地^{ここ}で第一等の料理屋だそうだが、おれは一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷^{やしき}を買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸^{みかけ}からして厳^いめしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織^{じんばおり}を縫^ぬい直して、胴着^{どうぎ}にする様なものだ。

二人が着いた頃^{ころ}には、人数^{にんず}ももう大概^{たいがい}揃^{そろ}つて、五十畳^{じゅう}の広間に二つ三つ人間の塊^{かたまり}が出来ている。五十畳だけに床^{とこ}は素敵に大きい。おれが山城屋^{せんりやう}で占^{せん}領した十五畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら二間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶^{かめ}を据^すえて、その中に松^{まつ}の大きな枝^{えだ}が挿^さしてある。松の枝

を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る氣遣いが
ないから、錢が懸らなくつて、よかろう。あの瀬戸物はどこで出
来るんだと博物の教師に聞いたら、あれは瀬戸物じゃありません、
伊万里いまりですと云った。伊万里だつて瀬戸物じゃないかと、云った
ら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸
で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だ
から、陶器とうきの事を瀬戸物というのかと思つていた。床の真中に大
きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きな字が二十八字かい
である。どうも下手へたなものだ。あんまり不味まずいから、漢学の先生
に、なぜあんなまずいものを麗れいれい々と懸けておくんですと尋ねた
ところ、先生はあれは海屋かいおくといつて有名な書家のかいた者だと

教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つてゐる。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて靠りかかるのに都合のいい所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織袴はかまで着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は主人公だというのでうらなり先生、これも日本服で控ひかえてゐる。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈きゆうくつだったから、すぐ胡坐あぐらをかいた。隣りの体操教師は黒ずぼんで、ちやんとかしくまつてゐる。体操の教師だけにいやに修行が積んでゐる。やがてお膳ぜんが出る。徳利とくりが並ぶ。幹事ならが立つて、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起たつ。ことごとく送別の辞

を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物な事を吹^{ふいちよう}聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になつたのだから致^{いた}し方^{かた}がないという意味を述べた。こんな嘘^{うそ}をついて送別会を開いて、それでちつとも恥^{はず}かしいとも思つていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは実に自分にとって大なる不幸であるともで云つた。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極^{きま}つてゐる。マドンナも大方この手で引掛^{ひっか}けた

んだろう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側むかいがわに坐まっていた山嵐がおれの顔を見てちよつと稲いな光なびかりをさした。おれは返電として、人指し指でべっかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がつたから、おれは嬉うれしかったので、思わず手をぱちぱちと拍うつた。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻へき遠えんの地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳じゅん朴ぼくな所で、職員生徒ことごとく上じょう代だ

いぼくちよく
 樸直の氣風を帯びているそうである。心にもないお世辞を振
 り蒔まいたり、美しい顔をして君子を陥おとしれたりするハイカラ野郎は
 一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚とつこうの士は必ず
 その地方一般の歡迎かんげいを受けられるに相違ない。吾輩わがはいは大いに
 古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延
 岡ふにんに赴任されたら、その地の淑女しゆくじよにして、君子の好速こうきゆうと
 なるべき資格あるものを択えらんで一日も早く円満なる家庭をかたち
 作つて、かの不貞無節なるお転婆てんばを事実の上において慚死さんしせしめ
 ん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳せき払いを
 して席に着いた。おれは今度も手を叩たたこうと思つたが、またみん
 ながおれの面かおを見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐

ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧ていねいに、自席から、
 座敷の端はしの末座まで行つて、慇懃いんぎんに一同に挨拶あいさつをした上、今
 般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生
 方が小生のためにこの盛大せいだいなる送別会をお開き下さったのは、
 まことに感銘かんめいの至りに堪たえぬ次第で——ことにただ今は校長、
 教頭その他諸君の送別の辞を頂戴ちやうだいして、大いに難有ありがたふくよく服
 膺うする訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにと
 ぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧あいこのほどを願います。とへえつく
 張つて席に戻もどつた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほと
 んど底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教
 頭に恭うやうやしくお礼を云っている。それも義理一いっぺん遍の挨拶ならだが、

あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心しんから感謝かんしているらしい。こんな聖人に真面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも真面目に謹きんちよう聴きしているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁しるを飲んでみたがまずいもんだ。口取くちとりに蒲鉾かまぼこはついてるが、どす黒くて竹輪の出来損できそこないである。刺身さしみも並なんでるが、厚くつて鮪まぐろの切り身を生で食うと同じ事だ。それでも隣となり近所の連中はむしゃむしゃ旨うまそうに食っている。大方江戸前の料理を食った事がないんだろう。

そのうち爛徳利かんどくりが頻繁ひんぱんに往来し始めたら、四方が急に賑にぎや

かになった。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃さかずきを頂いてる。いやな奴だ。うらなり君は順々に献酬けんしゅうをして、一巡周いちじゅんめぐるつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましょうと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまって、一盃差ばいし上げた。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立しゅったつはいつです、是非浜までお見送りをしましょうと云つたら、うらなり君はいえご用多おほのところ決してそれには及びおよませんと答えた。うらなり君が何と云つたって、おれは学校を休んで送る氣でいる。それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯ぱい、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律ろれつの巡りまわかねるのも一ひ

人^{とりふたり}二人出来て来た。少々^{たいくつ}退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺^{なが}めていると山嵐が来た。どうださっきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議^{こうぎ}を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。

「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡に居^おらないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫^{ねこつ}被^{かぶ}りの、

香具師^{やし}の、モモンガーの、岡っ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知ってる。それで演舌^{えんぜつ}が出来ないのは不思議だ」

「なにこれは喧嘩^{けんか}のときに使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしぺらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側^{えんがわ}をどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら馳^かけ出して来た。

「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決

して逃さない、さあのみたまえ。——いかさま師？——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引つ張って行く。実はこの兩人共便所に來たのだが、酔^よつてるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引つ張るのだらう。酔^よつ払いは目の中^{あた}の所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだらう。

「さあ、諸君、いかさま師を引つ張って來た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔^よわしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁^{かべ}際^{ぎわ}へ^お押し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗っているのは一つもない。自分の分を

きれいに食い尽して、五六間先へ遠征に出た奴もいる。校長はいつ帰ったか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら？　と芸者が三四人はいつて来た。おれも少し驚ろいたが、壁際へ押し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに啣えていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかった。向うからはいつて来た芸者の一人が、行き違いながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番綺麗な奴だ。遠くで聞えなかったが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかった。大方校長のあとを追懸けて帰つたんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽氣になつて、一同が鬨の声を揚げて
歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はな
んこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。
こつちでは拳を打つてゐる。よつ、はつ、と夢中で両手を振ると
ころは、ダーク一座の操人形よりよつぽど上手だ。向う
の隅ではおいお酌だ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言ひ直し
てゐる。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうち
で手持無沙汰に下を向いて考え込んでゐるのはうらなり君ばかりで
ある。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜
んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独
りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもら

わない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめい 胴間どうまごえ声を出して何か唄うたい始めた。

おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱かかえたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろと云ったら、金かねや太鼓たいこでねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちやんちきりん。叩いて廻あって逢あわれるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちやんちきりと叩いて廻あって逢あいたい人がある、と二た息にうたって、おおしんど云った。おおしんどなら、もつと楽そばなものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍そばへ来て坐った、野だが、鈴ちゃん逢あいたい人に逢あったと思つたら、すぐお帰りで、お気の毒さまみたよ

うでげすと相変らず嘸し家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野だは頓着なく、たまたま逢いは逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つてゐる。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊の国を踴るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踴る氣でいる。

向うの方で漢学のお爺さんが齒のない口を歪めて、そりや聞えませんか伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済したが、それから？ と芸者に聞いている。爺さんなんて物覺

えのわるいものだ。一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、
 でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——
 花月巻かげつまき、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァ
 イオリン、半可はんかの英語でぺらぺらと、I am glad to see you と唄う
 と、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが
 剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱
 暴な声なので、あつけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わ
 ず、ステッキを持って来て、踏破ふみやぶる千山万岳せんざんばんがくのけむり烟と真中まんなか
 へ出て独りで隠かくし芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊きいの
 国を済まして、かっぱれを済まして、棚たなの達磨だるまさんを済して丸まるは

裸^{だか}の越^え中^{ちゆう}禪^{ふん}一つになつて、棕^し櫚^{ゆう}箒^{ぼう}を小脇^きに抱^かい込んで、日清談判破裂^{はれつ}して……と座敷中練りあるき出した。まるで氣違^{きちが}いだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱^ぬがず控えているうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、越中禪の裸^{はだか}躑^{おどり}まで羽織袴で我慢^{がまん}してみている必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましようと思つて退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ歸つては失礼です、どうぞご遠^{えん}慮^りなくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。氣狂^{きちがい}会^{かい}です。さあ行きましよう、進ま

ないのを無理に勧めて、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癰かんしやくが起つているところだから、日清談判なら貴様はちゃんちやんだろうと、いきなり拳骨げんこつで、野だの頭をばかりと喰くわしてやった。野だは二三秒の間毒気を抜かれた体ていで、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ぶちになったのは情ない。この吉川をご打擲ちようちやくとは恐れ入った。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべているところへ、うしろから山嵐そうどが何か騷さわ動うが始まったと見てとつて、劍舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋くびすじをうんと攪つかんで引き戻もどした。

日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横に振ねじつたら、すたと倒たおれた。あとはどうなったか知らない。途とちゅう中でうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎだった。

十

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場れんぺいばで式があるというので、狸たぬきは生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員ひとの一人としていっしょにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だらけで、まばしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体

操の教師が隊伍たいごを整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それ
 へ職員が一人か二人ふたりずつ監督かんとくとして割り込む仕掛けしかである。仕
 掛けかけだけはすこぶる巧こうみよう妙なもののだが、実際はすこぶる不手際で
 ある。生徒は小供こどもの上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒
 の体面にかかわると思つてゐる奴等やつらだから、職員が幾人いくたりついて行
 ったつて何の役に立つもんか。命令も下さないのに勝手な軍歌を
 うたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに鬨ときの声を揚げた
 り、まるで浪人ろうにんが町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も
 鬨ときの声も揚げない時はがやがや何か喋舌しゃべつてゐる。喋舌しゃべらないでも
 歩けそうなものだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、
 いくら小言を云いつたつて聞きっこない。喋舌しゃべるのもただ喋舌しゃべるの

ではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあこれならよかろうと思つていた。ところが実際は^{おおちが}大違いである。下宿の婆^{ばあ}さんの言葉を借りて云えば、正に大違いの勘五郎^{かんごろう}である。生徒があやまつたのは心^{しん}から後悔^{こうかい}してあやまつたのではない。ただ校長から、命令^{めいれい}されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡^{ずる}い事をやめないのと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫^わびたりするのを、真面目^{まじめ}に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿^{ばか}と云うんだらう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するもの

仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだから分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじやありません、団子と申したのじやありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんぐらい云うに極まつてる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けら

れるような手段で、おれの顔を汚よごすのを抛ほうつておく、樗蒲ちよぼい一は
ない。向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ず
う体はおれより大きいや。だから刑罰けいばつとして何か返報をしてや
らなくつては義理がわるい。ところがこつちから返報をする時分
に尋じんじよう常の手段で行くと、向うから逆さかねじ振を食わして来る。貴
様がわるいからだと言つと、初手から逃にげ路みちが作つてある事だか
ら滔とうとう々と弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだ
け立派にしてそれからこつちの非を攻こうげき撃する。もともと返報に
した事だから、こちらの弁護は向うの非が拳がらない上は弁護に
ならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこつち
が仕掛けた喧嘩けんかのように、見倣みなされてしまう。大變な不利益だ。

それなら向うのやるなり、愚迂多良童子ぐうたらどうじを極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こつちも向うの筆法を用いて捕つかまえられるで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸えどつ子も駄目だめだ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくつちや始末がつかない。どうしても早く東京へ帰つて清きよといっしよになるに限る。こんな田舎いなかに居るのは墮落だらくしに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附ついてくると、何だか先鋒せんぽうが急にがやがや騒さわぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を

右へはずして、向うを見ると、おおてまち大手町を突つき当あつて薬師町へ曲がる角の所で、行き詰づまったぎり、押おし返したり、押し返されたりして揉もみ合っている。前方から静かに静かにと声を洩からして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範しはん学校が衝しょう突とつしたんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿さるのように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方せま狭い田舎で退屈たいくつだから、暇潰ひまつぶしにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳かけ出して行つた。すると前の方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖くせに、引き込めと、怒鳴どなつてゐる。後ろからは押せ押

せと大きな声を出す。おれは邪魔じゃまになる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少して出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭すどどい号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅しゆく肅しゆくとして行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違そういないが、つまり中学校が一步を譲ゆずつたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万ばんざい歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ歸つて、こないだじゆうから、氣に掛かつていた、清への返事をかきかけた。今度はもつと詳くわしく書いてくれとの注文だから、なるべく念入ねんいりに

認めしたたなくつちやならない。しかしいぎとなつて、半切はんきれを取り上

げると、書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わから
ない。あれにしようか、あれは面倒臭めんどくさい。これにしようか、

これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、

そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考えてみる

と、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨すみを磨すつ

て、筆をしめして、巻紙にらを睨めて、——巻紙を睨めて、筆をしめ

して、墨を磨つて——同じ所作を同じように何返も繰くり返したあ

と、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦あきらめて硯すずりの

蓋ふたをしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やつぱり東

京まで出掛けて行つて、逢あつて話をするのが簡便だ。清の心配は

察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断^だ食^{んじき}よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛^{ほう}り出して、ごろりと転がって肱^{ひじまくら}枕^{まくら}をして庭^{にわ}の方^なを眺^{なが}めてみたが、やっぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思つた。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心^{まこと}は清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事^{くわじ}で暮^くしてると思つてゐるだろう。たよりは死んだ時か病氣の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭^{とつば}は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜^み柑^{かん}があつて、堀^{へい}のそこから、目^め標^{じるし}になるほど高い。おれはうち

へ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生なつているところはすこぶる珍めずしいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗きれだろう。今でももう半分色の変ったのがある。婆ばあさんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨うまい蜜柑だそうだ。今に熟うたら、たと召めし上がれと云ったから、毎日少しずつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充じゅうぶん分食えるだろう。まさか三週間以内にここを去る事もなからう。

おれが蜜柑の事を考えているところへ、偶ぐうぜん然山嵐やまあらしが話しにやって来た。今日は祝勝会だから、君といつしよにご馳走ちそうを食おうと思つて牛肉を買つて来たと、竹の皮の包つつを袂たもとから引きずり

出して、座敷ざしきの真中まんなかへ抛り出した。おれは下宿で芋責いもぜめ豆腐責とうふぜになつてゐる上、蕎麦屋そば行き、団子屋だんご行きを禁じられてゐる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋なべと砂糖をかり込んで、煮方にがたに取りかかった。

山嵐むやみは無暗むやみに牛肉を頬張ほおばりながら、君あの赤シャツが芸者なに馴染なじみのある事を知つてゐるかと思ひ、知つてゐるとも、この間うらなりの送別会の時に来た一人がそうだろうと云つたら、そうだ僕ぼくはこの頃ごろようやく勘づいたのに、君はなかなか敏びんしやう捷しやうだと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性ていせいだの、精神的娛樂ていらくだのと云う癖くせに、裏まわへ廻まわつて、芸者と關係なんかつけとる、怪けしからん奴やつだ。それ

もほかの人が遊ぶのを寛容かんようするならいいが、君が蕎麦屋へ行ったり、団子屋へはいるのさえ取締とりしまり上害じょうがいになると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじゃ芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様さまは。馴染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化ごまかす気だから氣に食わない。そうして人が攻撃こうげきすると、僕は知らないとか、露西亞ロシア文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だとか云つて、人を烟けむに捲まくつもりなんだ。あんな弱虫は男じゃないよ。全く御ご殿女てんじょ中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおや

じは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだらう。——君そのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うとさなだむし條虫が湧くぜ」

「そうか、大抵たいてだいじょうぶ大丈夫だろう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋かどやへ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいてめんきつ面詰するんだね」

「見届けるつて、夜番よばんでもするのかい」

「うん、角屋の前に^{ますや}枡屋という宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子^{しょうじ}へ穴をあけて、見ているのさ」

「見ているときに来るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じゃいけない。二週間ばかりやるつもりでなくっちゃ」

「随分^{ずいぶん}疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜^{てつや}して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」

「少しぐらい身体が疲れたって構わんさ。あんな^{かんぶつ}奸物をあのままにしておくと、日本のためにならないから、僕が天に代って^ち誅^{ゆうりく}を加えるんだ」

「愉快だ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枡屋に懸合つてないから、今夜は駄目だ」

「それじゃ、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくるとこれでなかなかすばしいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談している
と、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生に
お目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじゃ

が、お留守^{るす}じゃけれ、大方ここじやろうてて捜^{さが}し当ててお出でたのじゃがなもと、闕^{しきい}の所へ膝^{ひざ}を突いて山嵐の返事を待つてる。山嵐はそうですかと玄関^{げんかん}まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘^{さそ}いに来たんだ。今日は高知^{こうち}から、何とか踊^{おど}りをしに、わざわざここまで多人数^{たにんず}乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊^{おどり}だというんだ、君もいっしょに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは踊なら東京でたくさん見ている。毎年八幡^{はちまん}様のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから汐酌^{しおく}みでも何でもちやんと心得ている。土佐つぽの馬鹿踊なんか、見たくもないと思つたけれども、せっかく山嵐が勧めるも

んだから、つい行く気になって門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。

会場へはいると、回向院えこういんの相撲すもうか本門寺ほんもんじの御会式おえしきのように
幾いく旒ながれとなく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗

をことごとく借りて来たくらい、縄なわから縄、綱つなから綱へ渡わたしかけ

て、大きな空が、いつになく賑にぎやかに見える。東の隅すみに一夜作り

の舞台ぶたいを設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそ

うだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀よしずの囲いをして、活花いけばなが

陳列ちんれつしてある。みんなが感心して眺うめているが、一向くだらな

いものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉うれしがるなら、背虫の色男や、

跛びつこの亭主ていしゅを持って自慢じまんするがよかろう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝國ていこくばんざい万歳とかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで営所のなかへ落ちた。次はぽんと音がして、黒い団子が、しよつと秋の空を射抜いぬくように揚あがると、それがおれの頭の上で、ぽかりと割れて、青い烟けむりが傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がった。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉ゆの町から、相生村あいおいむらの方へ飛んでいった。大方観音様の境内けいだいへでも落ちたろう。

式の時はずほどでもなかったが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかとおどろいたぐらいうじやうじやしている。利口りこうな顔はあまり見当たらないが、数から云うとたしかに馬

鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まった。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであつた。

いかめしい後鉢巻うしろはちまきをして、立つ付け袴たつつけばかまを穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携さげているには魂消たまげた。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔かんかくはそれより短いとも長くはない。たった一人列はなを離れて舞台の端はしに立つてるのがあるばかりだ。この仲間外れはずの男は袴だけはつけているが、後鉢巻は儉約して、抜身の代りに、胸へ太鼓たいこを懸かけている。太鼓は太神楽たいかぐらの太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑気のんきな声を出して、妙

な謡をうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳と普陀洛やの合併したものと思えば大した間違いにはならない。

歌はすこぶる悠長なもので、夏分の水飴のように、だら

しがないが、句切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようでも拍子は取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身が

ぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速なお手際で、

拝見していても冷々する。隣りも後ろも一尺五寸以内に生きた

人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振

り舞わすのだから、よほど調子が揃わなければ、同志撃を始め

て怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下と

かに振るのなら、まだ危険あぶなくもないが、三十人が一度に足踏あしづみを
して横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事
がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過おそぎれば、自分の鼻
は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き
身の動くのは自由自在だが、その動く範囲はんいは一尺五寸角の柱のう
ちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめ
かなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌しおくみや関せき
の戸との及およぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の
入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそう
だ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそう
だ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰こしの曲げ方も、ことごとくこの

ぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍^{はた}で見ていると、この大將が一番呑氣そうに、いやあ、はああと氣樂にうたつてゐるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れるとは思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわつと云う鬨^{おだ}の声がして、今まで穩やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかに波を打って、右左りに揺^{うご}き始める。喧嘩だ喧嘩だと言う声がすると思うと、人の袖^{そで}を潜^{くぐ}り抜^ぬけて来た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝^{けさ}の意趣^{いしゆがえ}返しをするんで、また師範^{しはん}の奴と決戦を始めたところですよ、早く来て下さいと云いながらまた人の波のなかへ潜^{もぐ}り込^こ

んでどつかへ行つてしまった。

山嵐は世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのにと逃げる人を避けながら一散に馳け出した。見ている訳にも行かないから取り鎮めるつもりだろう。おれは無論の事逃げる気はない。山嵐の踵を踏んであとからすぐ現場へ馳けつけた。

喧嘩は今が真最中である。師範の方は五六十人もあろうか、

中学はたしかに三割方多い。師範は制服をつけているが、中学は式後大抵は日本服に着換えているから、敵味方はすぐわかる。

しかし入り乱れて組んづ、解れつ戦つてゐるから、どこから、どう手を付けて引き分けていいか分らない。山嵐は困つたなど云う風で、しばらくこの乱雑な有様を眺めていたが、こうなつちや仕方

がない。巡査じゅんさがくると面倒だ。飛び込んで分けようと、おれの方を見て云うから、おれは返事もしないで、いきなり、一番喧嘩の烈はげしそうな所へ躍おどり込んだ。止よせ止よせ。そんな乱暴をすると学校の体面に関わる。よさないかと、出るだけの声を出して敵と味方の分界線らしい所を突つき貫ぬけようとしたが、なかなかそう旨うまくは行かない。一二間はいったら、出る事も引く事も出来なくなつた。目の前に比較ひかくてき的てき大きな師範生が、十五六の中学生と組み合っている。止せと云ったら、よさないかと師範生の肩かたを持つて、無理に引き分けようとする途端とたんにだれか知らないが、下からおれの足をすくつた。おれは不意を打たれて握にぎつた、肩を放して、横に倒たおれた。堅かたい靴くつでおれの背中の上へ乗つた奴がある。両手と膝

を突いて下から、跳ね起きたら、乗った奴は右の方へころがり落ちた。起き上がって見ると、三間ばかり向うに山嵐の大きな身体が生徒の間に挟まりながら、止せ止せ、喧嘩は止せ止せと揉み返されてるのが見えた。おい到底駄目だと云つてみたが聞えないのか返事もしない。

ひゆうと風を切つて飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中つた^{あた}なと思つたら、後ろからも、背中を棒^{ぼう}でどやした奴がある。教師の癖^{くせ}に出ている、打^ぶて打てと云う声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛^なげろ。と云う声もする。おれは、なに生意気な事をぬかすな、田舎者の癖にと、いきなり、傍^{そば}に居た師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゆうと来る。今度

はおれの五分刈ぶがりの頭を掠かすめて後ろの方へ飛んで行つた。山嵐はどうなつたか見えない。こうなつちや仕方がない。始めは喧嘩をとめにはいつたんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入つて引き下がるうんでれがあるものか。おれを誰だと思うんだ。身長なりは小さくつても喧嘩の本場で修行を積んだ兄さんだと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろと云う声がした。今まで葛練くずねりの中で泳いでるように身動きも出来なかつたのが、急に楽になつたと思つたら、敵も味方も一度に引上げてしまった。田舎者でも退た却いきやくは巧妙だ。クロパトキンより旨いくらいである。

山嵐はどうしたかと見ると、紋付もんつきの一重羽織ひとえばおりをずたずたにし

て、向うの方で鼻を拭^ふいている。鼻柱をなぐられて大分出血したんだそうだ。鼻がふくれ上がって真赤^{まっか}になつてすこぶる見苦しい。おれは飛白^{かすり}の袷^{あわせ}を着ていたから泥^{どろ}だらけになつたけれども、山嵐の羽織ほどの損害はない。しかし頬^{ほっ}ぺたがぴりぴりしてたまらない。山嵐は大分血が出ているぜと教えてくれた。

巡査は十五六名来たのだが、生徒は反対の方面から退却したので、捕^{つか}まったのは、おれと山嵐だけである。おれらは姓^{せい}名^{めい}を告げて、一部始終を話したら、ともかくも警察まで来いと云うから、警察へ行つて、署長の前で事の顛^{てん}末^{まつ}を述べて下宿へ歸つた。

あくる日眼が覚めてみると、身体中痛くてたまらない。久しく喧嘩をしつかなかったから、こんなに答えるんだろう。これじゃあんまり自慢もできないと床の中で考えていると、婆さんが四国新聞を持ってきて枕元に置いてくれた。実は新聞を見るのも退儀なんだが、男がこれしきの事に閉口たれて仕様があるものかと無理に腹這いになって、寝ながら、二頁を開けてみると驚ろいた。昨日の喧嘩がちやんと出ている。喧嘩の出ているのは驚ろかないのだが、中学の教師堀田某と、近頃東京から赴任した生意気なる某とが、順良なる生徒を使噓してこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあって生徒を指揮したる上、みだり

に師範生に向つて暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が附記ふきしてある。本県の中学は昔時せきじより善良温順の氣風をもつて全国の羨望せんぼうするところなりしが、輕薄けいはくなる二豎子じゅしのためわがこに吾校の特権を毀損きそんせられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人ごじんは奮然ふんぜんとして起つてその責任を問わざるを得ず。吾人は信ず、吾人が手を下す前に、当局者は相当の処分をこの無賴漢らいかんの上に加えて、彼等かれらをして再び教育界に足を入るる余地なからしむる事を。そうして一字ごとにみんな黒点を加えて、お灸きゆうを据すえたつもりでいる。おれは床の中で、糞くそでも喰くらえと云いいながら、むっくり飛び起きた。不思議な事に今まで身体の關節ふしぶしが非常に痛かつたのが、飛び起きると同時に忘れたように軽くなつ

た。

おれは新聞を丸めて庭へ抛なげつけたが、それでもまだ氣に入らなかつたから、わざわざ後架こうかへ持つて行つて棄すてて來た。新聞なんて無暗むやみうそな嘘を吐くもんだ。世の中に何が一番法螺ほらを吹くと云つて、新聞ほどの法螺吹きはあるまい。おれの云つてしかるべき事をみんな向むこうで並ならべていやがる。それに近頃東京から赴任した生意氣な某とは何だ。天下に某と云う名前の人があるか。考えてみる。これでもれつきとした姓せいもあり名もあるんだ。系図が見たけりや、多田満仲ただのまんじゆう以来の先祖を一人残らず拝ましてやらあ。――顔を洗つたら、頬ほっぺたが急に痛くなつた。婆さんに鏡をかせと云つたら、けさの新聞をお見たかなもしと聞く。読んで後架へ棄

てて来た。欲しけりや拾つて来いと云つたら、驚おどろいて引き下がった。鏡で顔を見ると昨日きのうと同じように傷がついている。これでも大事な顔だ、顔へ傷まで付けられた上へ生意気なる某などと、某呼ばわりをされればたくさんだ。

今日の新聞に辟へきえき易して学校を休んだなどと云われちや一生の名折れだから、飯を食つていの一号に出頭した。出てくる奴もやつ、出てくる奴もおれの顔を見て笑っている。何がおかしいんだ。貴様達にこしらえてもらった顔じゃあるまいし。そのうち、野だが出て来て、いや昨日はお手柄で、——名譽めいよのご負傷でげすか、と送別会の時に撲なぐつた返報と心得たのか、いやに冷ひやかしたから、余計な事を言わずに絵筆でも舐なめていろと云つてやった。するとこ

りや恐^{おそれい}入りやした。しかしさぞお痛い事でげしようと云うから、

痛かろうが、痛くなかろうがおれの面だ。貴様の世話になるもん

かと怒^ど鳴りつけてやったら、向^{むこ}う側の自席へ着いて、やつぱりお

れの顔を見て、隣^{とな}りの歴史の教師と何か内所話をして笑っている。

それから山嵐が出頭した。山嵐の鼻に至つては、紫^{むらさきいろ}色に膨^ぼ

張^{うちよう}して、掘^ほつたら中から膿^{うみ}が出そうに見える。自惚^{うぬぼれ}のせい

か、おれの顔よりよつぽど手ひどく遣^やられている。おれと山嵐は

机を並べて、隣り同志の近しい仲で、お負けにその机が部屋の戸

口から真正面にあるんだから運がわるい。妙な顔が二つ塊^{かた}まつて

いる。ほかの奴は退^{たいくつ}屈にさえなるときつとこつちばかり見る。

飛んだ事だと口で云うが、心のうちではこの馬鹿^{ばか}がと思つてるに

相違そういない。それでなければああいふ風に私語ささやきあ合あつてはくすくす笑う訳がない。教場へ出ると生徒は拍手をもつて迎むかえた。先生万ばん歳んざいと云うものが二三人あつた。景氣がいいんだか、馬鹿にされてるんだか分からない。おれと山嵐がこんなに注意の焼点しょうてんとなつてるなかに、赤シャツばかりは平常の通り傍そばへ来て、どうも飛んだ災難でした。僕は君等に対してお気の毒でなりません。新聞の記事は校長とも相談して、正誤を申し込む手続こきにしておいたから、心配しなくてもいい。僕の弟が堀田君を誘さそいに行つたから、こんな事が起おこつたので、僕は実に申し訳がない。それでこの件についてはあくまで尽じんりよく力するつもりだから、どうかあしからず、などと半分謝罪的な言葉を並べている。校長は三時間目に

校長室から出てきて、困った事を新聞がかき出しましたね。むずかしくならなければいいかと多少心配そうに見えた。おれには心配なんかない、先で免職めんしよくをするなら、免職される前に辞表を出してしまうだけだ。しかし自分がわるくないのにこつちから身を引くのは法螺吹きの新聞屋をますます増長させる訳だから、新聞屋を正誤させて、おれが意地にも務めるのが順当だと考えた。帰りがけに新聞屋に談判に行こうと思つたが、学校から取消とりけしの手続きはしたと云うから、やめた。

おれと山嵐は校長と教頭に時間の合間を見計みはからつて、嘘の無いところを一応説明した。校長と教頭はそうだろう、新聞屋が学校に恨うらみを抱いだいて、あんな記事をことさらに掲かげたんだらうと論断

した。赤シャツはおれ等の行為こういを弁解しながら、控ひかえ所じよを一人ごと
に廻まわつてあるいていた。ことに自分の弟が山嵐を誘い出したの
を自分の過失であるかのごとく吹ふい聴ちようしていた。みんなは全く
新聞屋がわるい、怪けしからん、両君は実に災難だと云った。

歸りがけに山嵐は、君赤シャツは臭くさいぜ、用心しないとやられ
るぜと注意した。どうせ臭いんだ、今日から臭くなつたんじやな
かろうと云うと、君まだ気が付かないか、きのうわざわざ、僕等
を誘い出して喧嘩けんかのなかへ、捲まき込こんだのは策さくだぜと教えてくれ
た。なるほどそこまでは気がつかなかった。山嵐は粗暴そぼうなようだ
が、おれより智慧ちえのある男だと感心した。

「ああやつて喧嘩をさせておいて、すぐあとから新聞屋へ手を廻

してあんな記事をかかせたんだ。実に奸物だ^{かんぶつ}」

「新聞までも赤シャツか。そいつは驚いた。しかし新聞が赤シャツの云う事をそう容易^{たやす}く聴^きくかね」

「聴かなくて。新聞屋に友達が居りや訳はないさ」

「友達が居るのかい」

「居なくても訳ないさ。嘘について、事実これこれだと話しや、すぐ書くさ」

「ひどいもんだな。本当に赤シャツの策なら、僕等はこの事件で免職になるかも知れないね」

「わるくすると、遣^やられるかも知れない」

「そんなら、おれは明日^{あした}辞表を出してすぐ東京へ帰っちゃまわあ。」

こんな下等な所に頼たのんだって居るのはいやだ」

「君が辞表を出したって、赤シヤツは困らない」

「それもそうだな。どうしたら困るだろう」

「あんな奸物の遣る事は、何でも証しょうこ拠この拳こぶしがらないように、拳こぶしがらないようにと工夫するんだから、反はん駁ぱくするのはむずかしい

ね」

「厄やっかい介かいだな。それじゃ濡ぬれぎぬ衣ぬいを着るんだね。面おも白しろくもない。

てんどうぜかひ
天道是耶非かだ」

「まあ、もう二三日様子を見ようじゃないか。それでいよいよとなったら、温泉ゆの町で取おさって抑おさえるより仕方がないだろう」

「喧嘩事件は、喧嘩事件としてか」

「そうさ。こつちはこつちで向うの急所を抑えるのさ」

「それもよからう。おれは策略は下手^{へた}なんだから、万事よろしく頼む。いざとなれば何でもする」

俺と山嵐はこれで分れた^{わか}。赤シャツが果たして山嵐の推察通りをやったのなら、実にひどい奴だ。到底^{とうてい}智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕^{わんりよく}力でなくつちや駄目^{だめ}だ。なるほど世界に戦争は絶えない訳だ。個人でも、とどの詰り^{つま}は腕力だ。

あくる日、新聞のくるのを待ちかねて、披^{ひら}いてみると、正誤どころか取り消しも見えない。学校へ行つて狸^{たぬき}に催促^{さいそく}すると、あしたぐらい出すでしょうと云う。明日になつて六号活字で小さく取消が出た。しかし新聞屋の方で正誤は無論しておらない。また

校長に談判すると、あれより手続きのしようはないのだと云う答だ。校長なんて狸のような顔をして、いやにフロック張っているが存外無勢力なものだ。虚偽きょぎの記事を掲げた田舎新聞一つ詫あやまらせる事が出来ない。あんまり腹が立ったから、それじゃ私が一人で行って主筆に談判すると云ったら、それはいかん、君が談判すればまた悪口を書かれるばかりだ。つまり新聞屋にかかれた事は、うそにせよ、本当にせよ、つまりどうする事も出来ないものだ。あきらめるより外に仕方がないと、坊主の説教じみた説諭せつゆを加えた。新聞がそんな者なら、一日も早く打ぶつ潰つぶしてしまつた方が、われわれの利益だろう。新聞にかかれるのと、泥鰌すっぱんに食いつかれるとが似たり寄つたりだとは今こんにち日ただ今狸の説明によつて始

めて承知^{つかまつ}した。

それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然^{ふんぜん}とやつて来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと云うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座^{そくざ}に一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよす方がよかろうと首を傾^{かたむ}けた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと云われたかと尋^{たず}ねるから、いや云われない。君は？ と聴き返すと、今日校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決^{しよけつ}してくれと云われたとの事だ。

「そんな裁判はないぜ。狸は大方腹鼓^{はらつづみ}を叩^{たた}き過ぎて、胃の位置が顛倒^{てんどう}したんだ。君とおれは、いっしよに、祝勝会へ出てき、

いつしよに高知のぴかぴか^{おど}か踊りを見てさ、いつしよに喧嘩をとめにはいったんじやないか。辞表を出せというなら公平に両方へ出せと云うがいい。なんで田舎^{いな}の学校はそう理窟^{りくつ}が分らないんだらう。^{じれった}焦慮いな」

「それが赤シャツの指^{さし}金^{がね}だよ。おれと赤シャツとは今までの行^ゆ懸^{きが}り上^{とうてい}到底^{とうてい}両立しない人間だが、君の方は今の通り置いても害にならないと思ってるんだ」

「おれだつて赤シャツと両立するものか。害にならないと思うなら生意氣だ」

「君はあまり単純過ぎるから、置いたつて、どうしても胡魔^{ごま}化^かされ
ると考えてるのさ」

「なお悪いや。誰^{だれ}が両立してやるものか」

「それに先だつて古賀が去つてから、まだ後任が事故のために到^と着^{うちやく}しないだろう。その上に君と僕を同時に追い出しちや、生

徒の時間に明きが出来て、授業にさし支^{つか}えるからな」

「それじゃおれを間^{あい}のくさびに一席^{うかが}伺^かわせる気なんだな。こん畜^ち生^{くしょう}、だれがその手に乗るものか」

翌^{あくるひ}日おれは学校へ出て校長室へ入つて談判を始めた。

「何で私に辞表を出せと云わないんですか」

「へえ？」と狸はあつけに取られている。

「堀田には出せ、私には出さないで好^いいと云う法がありますか」

「それは学校の方の都合で……」

「その都合が間違まちがつてまさあ。私が出さなくつて済むなら堀田だつて、出す必要はないでしょう」

「その辺は説明が出来かねますが——堀田君は去られてもやむをえんですが、あなたは辞表をお出しになる必要を認めませんか」

なるほど狸だ、要領を得ない事ばかり並べて、しかも落ち付きはら払つてゐる。おれは仕様がないから

「それじゃ私も辞表を出しましょう。堀田君一人辞職させて、私が安閑あんかんとして、留まっていられると思つていらつしやるかも知れないが、私にはそんな不人情な事は出来ません」

「それは困る。堀田も去りあなたも去つたら、学校の数学の授業がまるで出来なくなってしまうから……」

「出来なくなつても私の知つた事じやありません」

「君そう我儘わがままを云うものじやない、少しは学校の事情も察して

くれなくつちや困る。それに、来てから一月立つか立たないのに
辞職したと云うと、君の将来の履歴りれきに関係するから、その辺も少しは考へたらいいでしよう」

「履歴なんか構うもんですか、履歴より義理が大切です」

「そりやごもつとも——君の云うところは一々ごもつともだが、わたしの云う方も少しは察して下さい。君が是非辞職すると云うなら辞職されてもいいから、代りのあるまでどうかやってもらい

たい。とにかく、うちでもう一返考え直してみて下さい」

考え直すつて、直しようのない明々白白たる理由だが、狸が蒼あおくなったり、赤くなったりして、可愛想かわいそうになったからひとまず考え直す事として引き下がった。赤シャツには口もきかなかった。どうせ遣つつけるなら塊かためて、うんと遣つつける方がいい。

山嵐に狸と談判した模様を話したら、大方そんな事だろうと思つた。辞表の事はいざとなるまでそのままにしておいても差支さしつかえあるまいとの話だったから、山嵐の云う通りにした。どうも山嵐の方がおれよりも利巧りこうらしいから万事山嵐の忠告に従う事にした。

山嵐はいよいよ辞表を出して、職員一同に告別の挨拶あいさつをして

浜の港屋まで下ったが、人に知れないように引き返して、温泉の町ますやの枡屋の表二階へ潜ひそんで、障子しょうじへ穴をあけて覗のぞき出した。これを知ってるものはおればかりだろう。赤シャツが忍しのんで来ればどうせ夜だ。しかも宵よいの口は生徒やその他の目があるから、少なくとも九時過ぎに極きまつてゐる。最初の二晩はおれも十一時頃ごろまで張はりばん番をしたが、赤シャツの影かげも見えない。三日目には九時から十時半まで覗いたがやはり駄目だ。駄目を踏ふんで夜なかに下宿へ帰るほど馬鹿氣た事はない。四五日しごんちすると、うちの婆さんが少々心配を始めて、奥おくさんのおありなのに、夜遊びはおやめたがええぞなもと忠告した。そんな夜遊びとは夜遊びが違ちがう。こつちのは天に代かつて誅戮ちゆうりくを加える夜遊びだ。とはいふものの一週間も

通つて、少しも駭^{げん}が見えないと、いやになるもんだ。おれは性^{せつ}急^ちな性分だから、熱心になると徹夜^{てつや}でもして仕事をするが、その代り何によらず長持ちのした試しがない。いかに天誅党でも飽^あきる事に変りはない。六日目には少々いやになつて、七日目にはもう休もうかと思つた。そこへ行くと山嵐は頑固^{がんこ}なものだ。宵^{よい}から十二時過^{すぎ}までは眼を障子へつけて、角屋の丸ぼやの瓦斯燈^{がすとう}の下を睨^{にら}めつきりである。おれが行くと今日は何人客があつて、泊^{とま}りが何人、女が何人といろいろな統計を示すのには驚ろいた。どうも来ないようじやないかと云うと、うん、たしかに来るはずだが時々腕組^{うでぐみ}をして溜息^{ためいき}をつく。可愛想に、もし赤シャツがここへ一度来てくれなければ、山嵐は、生^{しょうがい}涯天誅を加える事は

出来ないのである。

八日目には七時頃から下宿を出て、まずゆるりと湯に入つて、それから町で鶏卵けいらんを八つ買った。これは下宿の婆さんの芋責いもぜめに应ずる策である。その玉子を四つずつ左右の袂たもとへ入れて、例の赤手拭あかてぬぐいを肩かたへ乗せて、懷手ふところをしながら、枡屋ますやの楷子段はしごだんに登つて山嵐の座敷ざしきの障子をあけると、おい有望有望と韋駄天いだてんのような顔は急に活氣ていを呈した。昨夜までは少し塞ぎふさぎの氣味で、はたで見ているおれさえ、陰氣臭いんきくさいと思つたくらいだが、この顔色を見たら、おれも急にうれしくなつて、何も聞かない先から、愉快かいと云つた。

「今夜七時半頃あの小鈴こすずと云う芸者が角屋へはいった」

「赤シャツといっしょか」

「いいや」

「それじゃ駄目だ」

「芸者は二人づれだが、——どうも有望らしい」

「どうして」

「どうしてって、ああ云う狡い奴だから、芸者を先へよこして、

後から忍んでくるかも知れない」

「そうかも知れない。もう九時だろう」

「今九時十二分ばかりだ」と帯の間からニッケル製の時計を出して見ながら云ったが「おい洋燈らんぷを消せ、障子へ二つ坊主頭が写つてはおかしい。狐きつねはすぐ疑ぐるから」

おれは一貫張いっかんばりの机の上にあつた置き洋燈らんぷをふつと吹きつけた。

星明りで障子だけは少々あかるい。月はまだ出ていない。おれと山嵐いっしょうけんめいは一生懸命に障子へ面かおをつけて、息を凝こらしている。チーンと九時半の柱時計が鳴つた。

「おい来るだろうかな。今夜来なければ僕はもう厭いやだぜ」

「おれは銭のつづく限りやるんだ」

「銭つていくらあるんだい」

「今日までで八日分五円六十銭払つた。いつ飛び出しても都合つごうのいいように毎晩勘かんじよう定じようするんだ」

「それは手廻てまわしがいい。宿屋で驚おどいてるだろう」

「宿屋はいいが、気が放せないから困る」

「その代り昼寝ひるねをするだろう」

「昼寝はするが、外出が出来ないんで窮きゆう屈くつでたまらない」

「天誅も骨が折れるな。これで天網てんもう恢かい々かい疎そにして洩もらしちまつたり、何かしちや、つまらないぜ」

「なに今夜はきつとくるよ。——おい見ろ見ろ」と小声になったから、おれは思わずどきりとした。黒い帽子ぼうしを戴いたた男が、角屋の瓦斯燈を下から見上げたまま暗い方へ通り過ぎた。違っている。おやおやと思った。そのうち帳場の時計が遠慮えんりよなく十時を打った。今夜もとうとう駄目らしい。

世間は大分静かになった。遊廊ゆうかくで鳴らす太鼓たいこが手に取るように聞きこえる。月が温泉ゆの山うしろの後からのつと顔を出した。往来はあか

るい。すると、下しもの方から人声が聞えだした。窓から首を出す訳には行かないから、姿を突つき留める事は出来ないが、だんだん近づいて来る模様だ。からんからんと駒こま下駄げたを引き擦ずる音がする。眼ななを斜ななめにとするとやつと二人の影法師かげぼうしが見えるくらいに近づいた。

「もう大丈夫だいじょうぶですね。邪魔じやまものは追っ払ったから」正ましく野のだの声である。「強がるばかりで策がないから、仕様がな」これは赤シャツだ。「あの男もべらんめえに似ていますね。あのべらんめえと来たら、勇み肌はだの坊ぼっちゃんだから愛あい嬌きやうがありますよ」「増給がいやだの辞表を出したいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下り

て、思う様打^ぶちのめしてやろうと思ったが、やつとの事で辛^{しん}防^{ぼう}した。二人はハハハハと笑いながら、瓦斯燈の下を潜^{くぐ}つて、角屋の中へはいった。

「おい」

「おい」

「来たぜ」

「とうとう来た」

「これでようやく安心した」

「野だの畜生、おれの事を勇み肌の坊っちゃんだと抜^ぬかしやがった」

「邪魔物と云うのは、おれの事だぜ。失敬千万な」

おれと山嵐は二人の帰路を要撃ようげきしなければならない。しかし

二人はいつ出てくるか見当がつかない。山嵐は下へ行つて今夜こ
とによると夜中に用事があつて出るかも知れないから、出られる
ようにしておいてくれと頼たのんで来た。今思うと、よく宿のものが
承知したものだ。大抵たいていなら泥棒どろぼうと間違えられるところだ。

赤シャツの来るのを待ち受けたのはつらかったが、出て来るの
をじつとして待つてゐるのはなおつらい。寝る訳には行かないし、

始終障子の隙すきから睨にらめているのもつらいし、どうも、こうも心が
落ちつかなくつて、これほど難儀なんぎな思いをした事はいまだにない。

いつその事角屋へ踏み込んで現場を取つて抑おさえようと発議はつぎしたが、
山嵐は一言にして、おれの申し出しりぞを斥しりぞけた。自分共が今時分飛び

込んだつて、乱暴者だと云つて途中とちゆう さへぎで遮られる。訳を話して面会を求めれば居ないと逃にげるか別室へ案内をする。不用意のところへ踏み込めると仮定したところで何十とある座敷のどこに居るか分るものではない、退屈でも出るのを待つより外に策はないと云うから、ようやくの事でとうとう朝の五時まで我慢がまんした。

角屋から出る二人の影を見るや否や、おれと山嵐はすぐあとを尾つけた。一番汽車はまだないから、二人とも城下まであるかなければならない。温泉ゆの町をはずれると一丁ばかりの杉並木すぎなみきがあれば、左右は田圃たんぼになる。それを通りこすところかしこに藁わら葺ぶきがあつて、畠はたけの中を一筋に城下まで通る土手へ出る。町さえはずれれば、どこで追いついても構わないが、なるべくなら、人家のな

い、杉並木で捕^{つら}まえてやろうと、見えがくれについて来た。町を外^{はず}れると急に馳^かけ足^{あし}の姿勢で、はやてのように後ろから、追いついた。何が来たかと驚^{おどろ}ろいて振り向^ふく奴^{やつ}を待^{まち}たと云^いつて肩^{かた}に手をかけた。野^のだは狼^{ろう}狽^{ばい}の気味で逃げ出^でそうという景色^{けしき}だったから、おれが前^{まへ}へ廻^{まわ}つて行^い手を塞^{ふさ}いでしまった。

「教頭^{けうとう}の職^{しやく}を持^もつてるものが何^{なに}で角屋^{かくや}へ行^いつて泊^{とま}つた」と山嵐はすぐ詰^なりかけた。

「教頭^{けうとう}は角屋^{かくや}へ泊^{とま}つて悪^{わる}るいという規則^{きそく}がありますか」と赤シャツは依然^{いぜん}として鄭^{てい}寧^{ねい}な言葉^{ことば}を使^{つか}つて顔^{かほ}の色^{いろ}は少々蒼^{そう}い。

「取^{とり}締^{しまり}上^{じよう}不都合^{ふごう}だから、蕎^{そば}麦^{ばく}屋^やや団^{だん}子^ご屋^やへさえはいつてはいかんと、云^いうくらい謹^{きん}直^{ちよく}な人が、なぜ芸^{げい}者^{しや}といっしよに宿^{しゆく}

屋へとまり込んだ」野だは隙を見ては逃げ出そうとするからおれはすぐ前に立ち塞がつて「べらんめえの坊っちゃんた何だ」と怒鳴り付けたら、「いえ君の事を云ったんじゃないんです、全くないんです」と鉄面皮に言訳がましい事をぬかした。おれはこの時気がついてみたら、両手で自分の袂を握^{にぎ}つてる。追っかける時に袂の中の卵がぶらぶらして困るから、両手で握りながら来たのである。おれはいきなり袂へ手を入れて、玉子を二つ取り出して、やっと云いながら、野だの面へ擲^たきつけた。玉子がぐちゃりと割れて鼻の先から黄味がだらだら流れだした。野だはよっぽど仰^{ぎよう}天^{てん}した者と見えて、わつと言いながら、尻^{しりもち}持^{もち}について、助けてくれと云った。おれは食うために玉子は買ったが、打^ぶつけるた

めに袂へ入れてる訳ではない。ただ肝かんしやく癩れびのあまりに、ついぶつけるともなしに打つけてしまったのだ。しかし野だが尻持を突いたところを見て始めて、おれの成功した事に気がついたから、
こん畜生ちくしよう、こん畜生と云いながら残る六つを無茶苦茶に擲たきつけたら、野だは顔中黄色になった。

おれが玉子をたたきつけているうち、山嵐と赤シャツはまだ談判最中である。

「芸者をつれて僕が宿屋へ泊ったと云う証しょうこ拠こがありますか」
「宵に貴様のなじみの芸者が角屋へはいつたのを見て云う事だ。
胡魔化せるものか」

「胡魔化する必要はない。僕は吉川君と二人で泊ったのである。芸

者が宵にはいろいろが、はいるまいが、僕の知った事ではない」

「だまれ」と山嵐は拳げんこつ骨を食わした。赤シャツはよろよろした

が「これは乱暴だ、狼藉ろうぜきである。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法でたくさんだ」とまたばかりと撲なぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくっちゃ、答えないんだ」とぽかぽかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいには二人とも杉の根方にうずくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。

「もうたくさんか、たくさんでなけりや、まだ撲なぐつてやる」とぽかんと兩人ふたりでなぐつたら「もうたくさんだ」と云った。野

だに「貴様もたくさんか」と聞いたら「無論たくさんだ」と答えた。

「貴様等は奸物だから、こうやって天誅を加えるんだ。これに懲りて以来つつしむがいい。いくら言葉巧みに弁解が立つても正義は許さんぞ」と山嵐が云ったら兩人共だまっていた。ことによると口をきくのが退儀なのかも知れない。

「おれは逃げも隠れもせん。今夜五時までは浜の港屋に居る。用があるなら巡査なりなんなり、よこせ」と山嵐が云うから、おれも「おれも逃げも隠れもしないぞ。堀田と同じ所に待ってるから警察へ訴えたければ、勝手に訴えろ」と云って、二人してすたすたあるき出した。

おれが下宿へ歸つたのは七時少し前である。部屋へはいるとすぐ荷作りを始めたら、婆さんが驚いて、どうおしるのぞなもと聞いた。お婆さん、東京へ行つて奥さんを連れてくるんだと答えて勘定を済まして、すぐ汽車へ乗つて浜へ来て港屋へ着くと、山嵐は二階で寝ていた。おれは早速辞表を書くうと思つたが、何と書いていいか分らないから、私儀都合有之辞職の上東京へ歸り申候につき、左様御承知被下度候。以上とかいて校長宛もうしそろにして郵便で出した。さようごしうちくだされたくそろ

汽船は夜六時の出帆しゅっぱんである。山嵐もおれも疲れて、ぐうぐう寝込んで眼が覚めたら、午後二時であつた。下女に巡査は来ないかと聞いたら参りませんと答えた。「赤シャツも野だも訴えな

かったなあ」と二人は大きに笑った。

その夜おれと山嵐はこの不^{ふじよう}浄な地を離^{はな}れた。船が岸を去れば去るほどいい心持ちがした。神戸から東京までは直行で新橋へ着いた時は、ようやく娑^{しやば}婆へ出たような気がした。山嵐とはすぐ分れたぎり今日まで逢う機会がない。

清^{きよ}の事を話すのを忘れていた。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革^{かばん}鞆を提げたまま、清や帰ったよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰って来て下さったと涙^{なみだ}をぼたぼたと落した。おれもあまり嬉^{うれ}しかったから、もう田舎^{いなか}へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云った。

その後ある人の周^{しゆうせん}旋^{がいてつ}で街鉄の技手になった。月給は二十

五円で、家賃は六円だ。清は玄げん関かん付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺はい炎えんに罹かつて死んでしまった。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋うめて下さい。お墓のなかで坊っちゃんこびなの来るのを楽しみに待つておりますと云つた。だから清の墓は小日向こひなの養源寺にある。

（明治三十九年四月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 夏目漱石」筑摩書房

1992（平成4）年1月20日第1刷発行

底本の親本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

※底本の注にれば、本作品の原稿には、「そのうち学校もいやになった。」の後に、漱石自身による2字あけの指定があるという。このファイルでは、その情報にもとづいて、当該の箇所を2字あけとした。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-

86)を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：柳沢成雄

1999年9月13日公開

2011年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

坊っちゃん

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>